論説

漢語語基の近代的意味変化とその漢字への影響
――語基「熱」と「熱線」,「供」と「供給･供述」,「円」と「円形」,「脈」の医学用語――

安部清哉・村松瞳・佐藤莉乃・北村優奈

第１章　はじめに

現代の我々は, 漢字「電」を電気の意味と理解しており, もともとは「稲光･稲妻」の意味の漢字であったことをすっかり忘れてしまっている。幕末･近代にかけて electricity=《電気》の訳語として使用され意味がすっかり変化してしまい，かつての意味は忘却されてしまった。

また，我々は，漢字「胞」を見れば,「細胞」かせいぜい「胞子」など，ひとつひとつのいわゆる細胞を意味する漢字だと思っている。かつて,「えな」と言われた「胞衣」，わかりやすく言えば“後産”で出てくる胎盤類を表す漢字,「えな」という訓をもつ漢字であることなどは漢字の専門家しかしらない。近代に，cell の訳語として「細胞」という熟語で定着したためである。

これらのように，幕末・近代にかけて，翻訳漢語や和製漢語の漢語熟語の一部として，あるいは，西洋概念を表す熟語用法の一部として使用されるようになったために，その意味や用法が，それ以前とは大きく変化・変質してしまった漢語語基は，思いのほか多い。しかし，上記「電」「胞」のように，あまりにも日常的な漢字であるためもあって，それらの漢字が，熟語のなかで使用された意味・用法とその幕末・近代における変化は，こ

れまであまり十分には研究されてきていなかった。

そのような漢語語基の研究上の問題について，安部（2021 の第 10 章）において，上記「電」「胞」ほかを例に取り上げ，今後の研究課題を指摘してみた。特に，語基の解説としての辞書的記述が遅れていることを指摘し，語基「電」を事例に，その史的変遷を踏まえた語基辞典（語基字典）的記述を例として，提示してみた。本稿は，その安部（2021）での問題提起と実践例を，他のより多くの語基で提示すべく試行してみたものである。本稿では，安部の指導のもと，安部の大学の演習授業参加者のうちの村松・佐藤・北村・岡野の各氏が指導した所定の調査にて取り組んでくれた成果である。

第 2 章（村松担当）は，漢語語基「熱」の意味変遷における翻訳語「熱線」の役割と影響について論じたものである。

第 3 章（佐藤担当）は，漢語語基「供」の意味変遷における「供給」および「口供」「供述」の出現の影響について論じたものである。

第 4 章（北村担当）は，漢語語基「円」の意味変遷における「円形」「半円」などの出現による意味の抽象化を論じたものである。

第 5 章（岡野担当）は，漢語語基「脈」の意味変遷における西洋医学用語としての影響を調査したものである。

第 2 章　漢語熟語「熱線」の史的変遷と語基「熱」の近代化
――心身に感じる“あつさ”から科学的熱エネルギーへ――

村松　瞳

1　はじめに

「熱」という漢字から受け取るイメージは，多くの人でほとんど同じといってよいだろう。すなわち，「熱」の訓読みである「あつい」或いはそ

の体言化した形の「あつさ」である。しかし一口に「あつさ」と言っても，それをさらに注意深く考えてみた時，厳密にはさらなる相違が存在していることに気付く。それは「熱」を使用した熟語をいくつか挙げ比較すれば分かりやすいであろう。

① 熱鉄　熱気　熱血

② 熱力学　燃焼熱　融解熱

上記の通り，①は「あついモノ」や「あつい心」といった心身に感じられる「あつさ」である。それに対して②は「熱」に関わる学問や，「燃焼」や「融解」といった化学反応に関連する「熱」を表している。すなわち科学的な意味を持つ用語なのである。しかし日本における「熱」の熟語を遡ってみると，上記の②のように科学的熱エネルギーを表す意味は，近代以前には見られなかった。これは，特に上記の「燃焼熱」や「融解熱」など，化学反応に伴う熱エネルギーを表現するようになるのは，近代になって科学が発展してからであろうことを考えれば，すぐに理解できることであろう。では，「熱」はいつ，どのようなことがきっかけで，心身に感じる「あつさ」から科学的熱エネルギーをも含意する漢字として使用できるようになったのだろうか。

本稿では，漢字「熱」について，漢語語基としてのその用法の歴史を詳細にたどりながら，上記のような近代的な意味変化のターニングポイントとなったと考えられる漢語熟語「熱線」に焦点を当てて考察してみることにしたい。

まず，この熟語に関して『日本国語大辞典』（以下『日国』）でどのように記述されているか確認しておくこととしたい。

○ねっ - せん【熱線】〔名〕

(1)「せきがいせん（赤外線）」に同じ。

＊物理学術語和英仏独対訳字書〔1888〕〈山口鋭之助〉「Netsusen.

Heat ray〈略〉熱線」

＊裸に虱なし〔1920〕〈宮武外骨〉神聖は無価値なり「光線熱線（ネッセン）化学線の三大威力を有する太陽は，玄妙無限の物であるが」

(2) 体温の変化の様子を線で示したもの。

＊ブルジョア〔1930〕〈芹沢光治良〉一「沢のプヌモは益々成功し，喀痰もなくなり，熱線は高低なく，体重表の線のみ昇った」

上記の『日国』における初出例は『物理学術語和英仏独対訳字書』の1888年であると記されているが，それよりも以前に1874年の『輿地新図．附録 乾之巻』にも「熱線」の例が見える。この中では「第五節　地面同**熱線**図並ニ解」(ベルゴース 1874) と記されている。このことから，この「熱線」という熟語は遅くとも1874年の『輿地新図．附録 乾之巻』以前には使われ始めていたと考えられる。

数ある「熱」を使った熟語の中から今回「熱」の歴史を辿るに当たり，「熱線」をターニングポイントとして選んだ理由を語る上で，「熱線」の位置づけを確認しておく必要があろう。以下の**【表 1】**は，後述する『日国』における「熱」の字音語素に記載されている「熱」の各熟語の『日国』での初出例を基に，出現した年代順に整理した表である。科学的熱エネルギーの意味として使われている熟語は太枠で記してある。また，表中の「熱線」は『日国』の記載によるものであり，それに対して「熱線＊」(1882年) は本稿3－2で述べる古い事例による。後者は，『日国』の記載による「熱線」と区別するために網掛けで示した。

【表 1】語基「熱」の熟語の初出年順年表（『日本国語大辞典』による）

意味	連番	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
Ⅰ	《肌に感じる温度・気候》	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ		Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ		Ⅰ	
Ⅱ	《生物の身体温度》				Ⅱ							Ⅱ
Ⅲ	《心理的集中・興奮》									Ⅲ		
Ⅳ	《科学的熱エネルギー》											
語形	熟語	炎熱	熱鉄	焦熱	熱気	熱湯	暑熱	余熱	寒熱	熱血	熱風	発熱
『日国』	『日国』字音語素の意味	①	①	①	①	①	①	②	①	①	①	③
時代	中国資料	(1)臾子		(1)淮南子	(1)淮南子	(1)礼記	(1)淮南子	(2)孫万寿	(1)礼記 (2)史記	(1)宋元	(1)本草綱目	(2)文選注
平安	818	(1)□										
	984 ～ 985		(1)□	(2)□								
	1016				(2)□							
	1060					(1)□						
	1110		(1)○									
鎌倉	13C 前			(2)○								
	1231 ～ 53					(1)○	(1)○					
	1242							(2)○				
	1250			(1)○								
	1275								(1)○			
室町	1346									(2)□		
	1384	(2)○										
	1516				(1)○						(1)○	
	1548							(1)○				
	1566											(2)○
	室町末								(2)○			
安土桃山	1579				(2)○							
	1599				(3)○							
	1603 ～ 04											
江戸	1604 ～ 08											
	1656	(1)○										
	1684											
	1718											
	1777											
	1779		(2)○									
	1787											
	1794											
	1820											
	1833											
	1837											
	1867											
明治	1868 ～ 70											
	1868 ～ 72											
	1870 ～ 71											
	1872									(1)○		
	1873											
	1876											
	1876 ～ 77											
	1879											
	1881											
	1882											
	★ 1882											
	1883 ～ 84											
	1884											
	1886									(2)○		
	1887											
	1888											
	1890											
	1890 ～ 91											
	1891											
	1894											
	1894 ～ 95											
	1896											
	1900											
	1901											
	1904											
	1905 ～ 06											
	1908											
	1909											
大正	1913											
	1916											
	1919											
	1920											
	1922											
	1924 ～ 25											
	1925											
	1926											
昭和	1930											
	1931											
	1934											
	1939											
	1943											

連番	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
《肌に感じる温度・気候》	Ⅰ		Ⅰ	Ⅰ			Ⅰ	Ⅰ			
《生物の身体温度》						Ⅱ					
《心理的集中・興奮》		Ⅲ			Ⅲ				Ⅲ		Ⅲ
《科学的熱エネルギー》										Ⅳ	
熱語	火熱	熱	熱帯	熱砂	熱腸	微熱	酷熱	冷熱	熱心	電気熱	熱中
『日国』字音語素の意味	②	④	①	①	①	③	①	①	④	②	④
中国資料	(1)墨子	(1)詩経(1)北史(4)漢書(7)陶潜						(1)大日経疏(3)白居易			(1)孟子
818											
984 ～ 985											
1016											
1060											
1110											
13C 前											
1231 ～ 53											
1242											
1250											
1275											
1346											
1384											
1516											
1548											
1566											
室町末											
1579											
1599											
1603 ～ 04	(1)○										
1604 ～ 08		(6)○									
1656											
1684		(7)○									
1718		(4)○									
1777			(1)○								
1779											
1787				(1)○							
1794					(1)□						
1820						(1)○					
1833							(1)□				
1837								(3)○			
1867									(2)□		
1868 ～ 70										(1)○	
1868 ～ 72											(1)○
1870 ～ 71											
1872											
1873								(1)○			
1876					(2)○						
1876 ～ 77											
1879									(1)○		
1881											
1882											
★ 1882											
1883 ～ 84											
1884											
1886									(2)○		
1887		(2)○									
1888											
1890					(1)○						
1890 ～ 91											
1891		(5)○									
1894	(2)○										
1894 ～ 95											
1896								(2)○			
1900											
1901											
1904											
1905 ～ 06											
1908											
1909											
1913							(1)○				
1916											
1919											
1920											
1922											
1924 ～ 25											
1925											
1926											
1930											
1931											
1934											
1939		(9)○									
1943											

連番	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
《肌に感じる温度・気候》			Ⅰ	Ⅰ					Ⅰ		
《生物の身体温度》											
《心理的集中・興奮》	Ⅲ						Ⅲ	Ⅲ		Ⅲ	
《科学的熱エネルギー》		Ⅳ			Ⅳ	Ⅳ					Ⅳ
熟語	熱愛	太陽熱	熱量	白熱	熱学	熱線＊	熱涙	熱情	熱火	熱望	熱力学
『日国』字音語素の意味	④	②	②	①	②		④	④	①	④	②
中国資料											
818											
984 ～ 985											
1016											
1060											
1110											
13C 前											
1231 ～ 53											
1242											
1250											
1275											
1346											
1384											
1516											
1548											
1566											
室町末											
1579											
1599											
1603 ～ 04											
1604 ～ 08											
1656											
1684											
1718											
1777											
1779											
1787											
1794											
1820											
1833											
1837											
1867											
1868 ～ 70											
1868 ～ 72											
1870 ～ 71	(1)○										
1872											
1873											
1876		(1)○									
1876 ～ 77			(2)○								
1879											
1881				(1)□							
1882					(1)○						
★ 1882						○					
1883 ～ 84							(1)○	(1)○	(1)○		
1884										(1)○	
1886											(1)□
1887											
1888											
1890											
1890 ～ 91				(2)○							
1891											
1894											
1894 ～ 95											
1896											
1900											
1901											
1904											
1905 ～ 06											
1908											
1909											
1913											
1916			(1)○								
1919											
1920											
1922											
1924 ～ 25											
1925											
1926				(1)○							
1930											
1931											
1934											
1939											
1943											

連番	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
《肌に感じる温度・気候》											
《生物の身体温度》											
《心理的集中・興奮》			Ⅲ					Ⅲ	Ⅲ		
《科学的熱エネルギー》	Ⅳ	Ⅳ		Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ			Ⅳ	Ⅳ
熟語	熱機関	潜熱	熱意	熱線	熱化学	原子熱	熱電気	熱狂	熱誠	燃焼熱	融解熱
『日国』字音語素の意味	②	②	④	②	②	②	②	④	④	②	②
中国資料											
818											
984 ～ 985											
1016											
1060											
1110											
13C 前											
1231 ～ 53											
1242											
1250											
1275											
1346											
1384											
1516											
1548											
1566											
室町末											
1579											
1599											
1603 ～ 04											
1604 ～ 08											
1656											
1684											
1718											
1777											
1779											
1787											
1794											
1820											
1833											
1837											
1867											
1868 ～ 70											
1868 ～ 72											
1870 ～ 71											
1872											
1873											
1876											
1876 ～ 77											
1879											
1881											
1882											
★ 1882											
1883 ～ 84											
1884											
1886	(1)□	(2)□									
1887			(1)○								
1888				(1)□	(1)□	(1)□	(2)□				
1890		(1)○									
1890 ～ 91											
1891								(1)○			
1894											
1894 ～ 95									(1)○		
1896											
1900										(1)□	(1)□
1901											
1904											
1905 ～ 06											
1908											
1909											
1913											
1916											
1919											
1920				(1)○							
1922											
1924 ～ 25											
1925											
1926											
1930				(2)○							
1931											
1934											
1939											
1943											

連番	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55
《肌に感じる温度・気候》					Ⅰ						
《生物の身体温度》			Ⅱ	Ⅱ		Ⅱ			Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
《心理的集中・興奮》							Ⅲ				
《科学的熱エネルギー》	Ⅳ	Ⅳ						Ⅳ			
熟語	生成熱	実熱量	低熱	猩紅熱	高熱	高熱	熱烈	地熱	解熱	産褥熱	病熱
『日国』字音語素の意味	②	②	①	③	①	③	④	②	③	③	③
中国資料							(1)抱朴子				
818											
984 ～ 985											
1016											
1060											
1110											
13C 前											
1231 ～ 53											
1242											
1250											
1275											
1346											
1384											
1516											
1548											
1566											
室町末											
1579											
1599											
1603 ～ 04											
1604 ～ 08											
1656											
1684											
1718											
1777											
1779											
1787											
1794											
1820											
1833											
1837											
1867											
1868 ～ 70											
1868 ～ 72											
1870 ～ 71											
1872											
1873											
1876											
1876 ～ 77											
1879											
1881											
1882											
★ 1882											
1883 ～ 84											
1884											
1886											
1887											
1888											
1890											
1890 ～ 91											
1891											
1894											
1894 ～ 95											
1896											
1900	(1)□	(1)□									
1901			(1)○	(1)○							
1904					(1)○	(1)○					
1905 ～ 06							(2)○				
1908								(1)○			
1909									(1)○		
1913										(1)○	
1916											
1919											(1)○
1920											
1922											
1924 ～ 25											
1925											
1926											
1930											
1931											
1934											
1939											
1943											

連番	56	57	58	59	60	61	62	63	64
《肌に感じる温度・気候》									
《生物の身体温度》	Ⅱ		Ⅱ						
《心理的集中・興奮》		Ⅲ					Ⅲ	Ⅲ	
《科学的熱エネルギー》				Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ			Ⅳ
熟語	熱感	熱願	平熱	電熱	輻射熱	熱源	熱弁	熱演	耐熱
『日国』字音語素の意味	③	④	③	②	②	②	④	④	②
中国資料									
818									
984 ～ 985									
1016									
1060									
1110									
13C 前									
1231 ～ 53									
1242									
1250									
1275									
1346									
1384									
1516									
1548									
1566									
室町末									
1579									
1599									
1603 ～ 04									
1604 ～ 08									
1656									
1684									
1718									
1777									
1779									
1787									
1794									
1820									
1833									
1837									
1867									
1868 ～ 70									
1868 ～ 72									
1870 ～ 71									
1872									
1873									
1876									
1876 ～ 77									
1879									
1881									
1882									
★ 1882									
1883 ～ 84									
1884									
1886									
1887									
1888									
1890									
1890 ～ 91									
1891									
1894									
1894 ～ 95									
1896									
1900									
1901									
1904									
1905 ～ 06									
1908									
1909									
1913									
1916									
1919									
1920									
1922	(1)○								
1924 ～ 25		(1)○	(1)○						
1925				(1)○					
1926									
1930					(1)○	(1)○			
1931							(1)○		
1934								(1)○	
1939									
1943									(1)○

上記の表を見ると「熱線」よりも前に科学的熱エネルギーの意味の熟語がいくつか既に登場しているように見えるが，それはこの表が『日国』での初出例を基にしているからである。上述した通り「熱線」は 1874 年の『輿地新図 . 附録 乾之巻』にも見られるということを踏まえると，上記の表において科学的熱エネルギーの意味を持つ熟語として最も古い 1876 年の「太陽熱」よりも前に登場していたことになるのである。

また，「太陽熱」は太陽自体が熱を持っているため「あついモノ」の範疇であると考えることもできる。それに対して「熱線」は，通常「線」そのものに熱さが付随して存在する訳ではなく，またそれが熱くなるということも生じにくい。後に導線や線輪といった「線」を熱する仕組みを持つ機器（いわゆる電熱器）が登場するが，明治時代はまだそのような機器は一般化していなかったため，ここでの「熱線」は「熱い線」とは理解できない。しかし「光線」のような概念を含み「熱エネルギー」を持った線を意味する「熱線」は，初めて熱エネルギーという概念を得た熟語ということが「太陽熱」よりも明確である。すなわち,「熱線」は科学的熱エネルギーの意味として使われている熟語の初期の事例として相応しいと考える。

熟語「熱線」とその後における《科学的熱エネルギー》の意味を持つ熟語の増加を踏まえると，語基「熱」は，古くは心身に感じる“あつさ”,“皮膚感覚的あつさ”の意味が中心だったが，近代以降，科学的用語と言える「熱線」ほかの登場によって,《科学的熱エネルギー》の意味を新たに獲得し，その熟語を増加させていくようになったと解釈できるのである。

本稿はこの「熱線」という熟語がいつどのようにして生まれ，いつ日本に定着していったのかを考えようとするものである。

2　漢字「熱」の文字史―漢字としての用法

2－1　『字通』での語基「熱」の字源的意味

漢字「熱」の文字史を辿るに当たり，まず字源的意味を確認しておく必要がある。『字通』には以下のように記述されている。

○【熱】15 4433　ネツ　あつい

会意

埶（げい）＋火。埶は藝（芸）の正字で，〔説文〕三下に「種（う）うるなり」とあって，種芸の意。熱十上には「溫なり」と訓し，埶声とするが，声が合わず，「爇（や）く」という字と声義が近い。おそらく草を爇く意であろう。暑熱の意となり，また〔孟子，万章上〕「君に得ざれば則ち熱中す」のように，心的な状態にも移していう。1あつい，やく，熱する。2あたたかい，あつさ，のぼせる，ねつ。3勢いのあるさま，はげしいさま，いそがしいさま。

古訓

〔名義抄〕熱　アツシ・ホトホル・アタヽカナリ　〔字鏡集〕熱　アツシ・アタヽカナリ・タクマシ・アツカフ・トホル

（白川 1996：1249）

2－2　『大漢和辞典』と『漢語大詞典』での語基「熱」の意味と用法

次に中国での用法も念の為確認しておきたい。そこで，以下に日本でも代表的な漢和辞典である『大漢和辞典』を参照し，「熱」がどのように記述されているか見ておくこととする。『大漢和辞典』では次のようにある（但し用例部分は略す）。

○【熱】ゼツ　〔集韻〕而列切　屑

ネチ　[illegible]、jê[4]　（＊「篆小」の字は略す）

慣ネツ

㊀あつい。もと𤇾（7-19436）に作る。㋑あたたかい。㋺あつい。

㊁あつくする。やく。あつくなる。こげる。やける。

㊂あつさ。炎暑の時氣。

㊃ねつ。㋑物を溫め又は燒く氣。溫暖の感覺を與へる本源。㋺からだのあたたかさ。體溫。生命のもと。㋩亢進した體溫。體溫の高くなる病氣。熱病。㋥あついもの。

㊄のぼせる。興奮する。悶え煩ふ。一心になる。熱中する。

㊅いそがしい。時めく。

㊆物のさま。熱鬧（77）・熱然（73）を見よ。

㊇姓。

㊈現 親密になる。邦 ねつ。物事に對する心の趨向。氣のり。

（『大漢和辞典』巻七 :510）

そして，中国の辞典における記述も確認するため，『漢語大詞典』を参照する。以下が『漢語大詞典』における「熱」の記述である。こちらも用例部分は略し，各意味の隣に〔 〕内で日本語訳を付している。なお，以下では原文の簡体字を便宜的に日本の通行字体にした場合がある。

○熱［热］

❶温度高。与“冷”相对。〔高温。「冷」の反対の意味。〕

❷指暑气；暑天。〔暑気を指す。暑い日。〕

❸加热；使之热。〔加熱する。熱くする。〕

❹烧；烧灼。〔焼く。焼灼する。〕

❺焦躁；忧灼。〔苛々する。憂い事にひどく思い悩む。〕

❻激动。〔興奮。〕

❼喻有权势, 显赫。〔権勢を振るうこと，（栄華を極めて）赫々たる様の喩え。〕

❽形容羡慕至极。〔とても羨しく思うこと。〕

❾新的；吸引人的。〔新しい。魅力的な。〕

❿情意深厚。〔愛情が深い。〕

⓫指男女恋爱。〔男女の恋愛を指す。〕

⓬喧闹；热闹。〔騒々しい。賑やかである。〕

⓭喻成熟的时机。〔時が熟している喩え。〕

⓮中医学名词。⑴热邪。六气之一 , 为致病的因素。⑵热症。古指阳气亢盛的病症。后多指身体发烧。⑶治疗方法。温法或祛寒法。⑷药物性能。寒热温凉四气之一。〔漢方用語。⑴熱邪。六気の一つで，病気の原因となるもの。⑵熱の症状。古くは陽気が亢進する病症。今では熱があることを指すことが多い。⑶治療法。温法，または祛寒法。⑷薬の特性。寒・熱・温・涼の四気の一つ。〕

⓯物理学名词。物质运动的一种表现。其本质是大量粒子（分子，原子等）无规则运动的表现。这种运动越剧烈 , 由这些粒子组成的物体或体系就越热。热量有时亦省称为热。〔物理学用語。物質の運動の表れ。その本質は大量の粒子（分子，原子など）の不規則な運動の表れである。この運動が激しければ激しいほど，その粒子で構成された物体や体系は高温になる。熱量は熱と略記されることもある。〕

⓰姓。〔苗字。〕

（『漢語大詞典』7:232）

これらについては，次節で参照する『日国』での語基「熱」の字音語素と単独用法の記述と併せて後述する。

2－3 『日国』での語基「熱」（音読み）の字音語素と単独用法の意味

最後に，語基「熱」の単独用法についても『日国』で確認しておくこととしたい。以下は『日国』における「熱」の「字音語素」の記述と，単独用法の記述である。

○［字音語素］【熱】

(1) あつい。あつさ。高温。／寒熱，冷熱／焦熱／高熱，低熱，酷熱，白熱，炎熱，暑熱／熱火，熱気，熱血，熱砂，熱帯，熱鉄，熱湯，熱風，熱腸／

(2) 温度を高める力。／火熱，地熱，潜熱，電熱，余熱，太陽熱，輻射熱，燃焼熱，融解熱／耐熱，放熱／熱源，熱線，熱量，熱化学，熱機関，熱効率，熱電対，熱電流，熱力学，熱解離，熱拡散，熱管理，熱処理，熱伝導／

(3) 体のあつさ。体温。／高熱，微熱，平熱，病熱，黄熱病，猩紅熱，産褥熱／解熱，発熱／熱感／

(4) 一つのことに心をうち込む。ねっしん。／熱烈／熱愛，熱演，熱狂，熱願，熱中，熱望／登山熱，旅行熱／熱意，熱心，熱情，熱誠，熱弁，熱涙／ねつ（熱）

○［単独用法］＝ねつ【熱】〔名〕

(1) 触れたり，近づいたりした時などに，肌（はだ）に感じるあつさ。また，気候の暑いこと。

＊詩経 - 大雅・桑柔「誰能執熱，逝不以濯」

＊北史 - 斉趙郡王叡伝「長史宋欽道以叡冒熱，遣倍道送氷」

(2) 物を温めたり焼いたりする力。

＊尋常小学読本〔1887〕〈文部省〉七「是れ，大陽の熱によりて，水は，変じて水蒸気となり，空中に浮び上るなり」

(3) 温度の異なる二つの物体の間で，高温側から低温側に移動するエネルギー。その移動の仕方は，伝導，対流，放射に分類される。孤立した物体に移動した熱はその内部エネルギーの増加となり，また，その物体のする仕事として消費される。

(4) 病気などによって平常より高くなった体温。

＊浄瑠璃・日本振袖始〔1718〕四「熱の差引き，様々の看病験しもなし」

＊銀の匙〔1913 ～ 15〕〈中勘助〉前・三三「やうやく頭痛もなほり，熱もひいておきると」

＊漢書 - 西域伝「令人身熱無色，頭痛嘔吐」

(5)「ねつびょう（熱病）」の略。

＊いさなとり〔1891〕〈幸田露伴〉五一「家の外の冷い風に当って居ては何にせよ大毒，〈略〉道中などでは熱病（ネツ）になりやすいものなれば」

＊邪宗門〔1909〕〈北原白秋〉魔睡・十月の顔「『十月』は熱を病みしか，疲れしか」

(6) あることに精神を集中すること。熱中すること。

＊ロドリゲス日本大文典〔1604 ～ 08〕「シンイノ netuo（ネツヲ）サル」

＊竹沢先生と云ふ人〔1924 ～ 25〕〈長与善郎〉竹沢先生の顔・二「君の謂ふ真剣味とか，熱とかがもっと露骨に出てはゐたね」

(7) 一時的に興奮すること。のぼせること。「熱が冷める」「熱をあげる」

＊浮世草子・好色二代男〔1684〕八・四「我おほしめしての御事，（ネツ）とはおもはれず」

＊浮雲〔1887 ～ 89〕〈二葉亭四迷〉はしがき「文明の風改良の熱一度に寄せ来るどさくさ紛れ」

＊春の晩〔1915〕〈田村俊子〉五「『京子のところ―』幾重は然う思ったが，さっきほどの熱がおこらなかった」

＊陶潜 - 形影神，影答形詩「身没名亦尽，念之五情熱」

(8) 身勝手な気炎。気勢。「熱を吹く」

(9) 稲熱病（いもちびょう）をいう。

＊稲熱病〔1939〕〈岩倉政治〉二「今までねつ（稲熱病）の出る年は，まっさきにやられて村でも評判のところぢゃったれど」

上記と２－２で引用した『大漢和辞典』と『漢語大詞典』の記述を踏まえ，日本と中国における「熱」の意味について比較検討する。以下の**【表２】**は『大漢和辞典』と『漢語大詞典』における語基「熱」の記述と『日国』における「熱」の字音語素と単独用法の記述を対照させたものである。

【表 2】『大漢和辞典』・『漢語大詞典』・『日国』における「熱」記述の比較

連番	どちらかの辞書とほぼ一致する意味 ○ ／ 中国の辞典にあって『日国』にはない意味×	『大漢和辞典』	『日国』の字音語素	『漢語大詞典』	『日国』の音読みでの単独用法
1	○	㈠あつい。㈡あたたかい。㈢あつい。	(1) あつい。あつさ。高温。／寒熱，冷熱／焦熱／高熱，低熱，酷熱，白熱，炎熱，暑熱／熱火，熱気，熱血，熱砂，熱帯，熱鉄，熱湯，熱風，熱腸／	❶温度高。与”冷”相対。〔高温。“冷たい”とは逆の意味〕	(1) **触れたり，近づいたりした時などに，肌（はだ）に感じるあつさ。**また，気候の暑いこと。
2	○	㈡あつくする。やく。あつくなる。こげる。やける。	(2) 温度を高める力。／火熱，地熱，潜熱，電熱，余熱，太陽熱，輻射熱，燃焼熱，融解熱／耐熱，放熱／熱源，熱線，熱量，熱化学，熱機関，熱効率，熱電対，熱電流，熱力学，熱解離，熱拡散，熱管理，熱処理，熱伝導／	❸加熱；使之熱。〔加熱する，熱くする。〕 ❹焼；焼灼。〔焼く。焼灼する。〕	(2) 物を温めたり焼いたりする力。

3	○	㈢あつさ。炎暑の時氣。		❷指暑气；暑天。〔夏の暑さ，暑い日。〕	(1)触れたり，近づいたりした時などに，肌(はだ)に感じるあつさ。**また，気候の暑いこと。**
4	○	㈣ねつ。㈠物を温め又は燒く氣。溫暖の感覺を與へる本源。㈡からだのあたたかさ。體溫。生命のもと。㈥亢進した體溫。體溫の高くなる病氣。熱病。㈢あつい もの。	(3)体のあつさ。体温。／高熱，微熱，平熱，病熱，黄熱病，猩紅熱，産褥熱／解熱，発熱／熱感／	⓫中医学名詞。(1)熱邪。六气之一，為致病的因素。(2)熱症。古指陽气亢盛的病症。后多指身体発焼。(3)治療方法。温法或祛寒法。(4)薬物性能。寒熱温涼四气之一。〔漢方用語。(1)熱邪。六気の一つで，病気の原因となるもの。(2)熱の症状 陽気が亢進している状態を指す古語。今では熱があることを指すことが多くなった。(3)治療法。温めたり，冷やしたりする方法。(4)薬の特性。寒・熱・温・涼の4つの気の一つ。〕	(4)病気などによって平常より高くなった体温。 (5)「ねつぴょう(熱病)」の略。 (9)稲熱病（いもちびょう）をいう。
5	○	㈤のぼせる。興奮する。悶え煩ふ。一心になる。熱中する。	(4)一つのことに心をうち込む。ねっしん。／熱烈／熱愛，熱演，熱狂，熱願，熱中，熱望／登山熱，旅行熱／熱意，熱心，熱情，熱誠，熱弁，熱涙／ねつ（熱）	❻激動。〔興奮。〕	(6)あることに精神を集中すること。熱中すること。 (7)一時的に興奮すること。のぼせること。「熱が冷める」「熱をあげる」
6	×			❺焦躁；憂灼。〔苛々する。憂い事にひどく思い悩む。〕	

7	×	㈥いそがしい。時めく。		❼喻有権勢，顕赫。〔権勢を振るうこと。（栄華を極めて）赫々たる様の喩え。〕	
8	×			❽形容羨慕至極。〔とても羨しく思うこと。〕	
9	×			❾新的；吸引人的。〔新しい。魅力的な。〕	
10	○	㈦物のさま。		⓬喧闐；熱闐。〔騒々しい。賑やかである。〕 ⓯物理学名詞。物質運動的一種表現。其本質是大量粒子（分子，原子等）無規則運動的表現。这種運動越劇烈，由這些粒子組成的物体或体系就越熱。熱量有時亦省称為熱。〔物理的な用語。物質の動きの表れ。基本的な質量とは，多数の粒子（分子，原子など）の不規則な動きを表現したもの。この動きが激しければ激しいほど，その粒子で構成された物体やシステムは高温になる。熱はヒートと略記されることもある。〕	(3) 温度の異なる二つの物体の間で，高温側から低温側に移動するエネルギー。その移動の仕方は，伝導，対流，放射に分類される。孤立した物体に移動した熱はその内部エネルギーの増加となり，また，その物体のする仕事として消費される。
11	×	㈧姓。		⓰姓。〔苗字。〕	
12	○	㈨現親密になる。邦ねつ。物事に對する心の趨向。氣のり。		⓪情意深厚。〔愛情が深い。〕 ⓫指男女恋愛。〔男女の恋愛を指す。〕	(8) 身勝手な気炎。気勢。「熱を吹く」
13	×			⓭喩成熟的時机。〔時が熟している喩え。〕	

以上で整理した表を踏まえ，日本と中国での語基「熱」の意味と用法における共通点と相違点は何だろうか。

上記の表において「×」で示した通り，『大漢和辞典』における「㊅いそがしい。時めく。」と「㊇姓。」や『漢語大詞典』における「❺焦躁;憂灼。〔落ち着きがなく，不安感がある。〕」「❽形容羨慕至極。〔大きな羨望の表現。〕」「❾新的；吸引人的。〔新しい，魅力的。〕」「⓭喩成熟的時机。〔時は熟している。〕」の意味は,『日国』すなわち日本の例として確認できなかった。これらは中国独自の用法であるといえるだろう。

3 「熱線」の誕生から定着まで

3－1 「熱線」の先行研究による研究史

漢語「熱線」の語史については，先行研究としての論文などが見当たらない。唯一，『明治のことば辞典』に以下のような用例が列挙されている。

○ねつせん　熱線

［術語辞彙・明 43］　Heat ray.

［大辞典・明 45］　物理学ノ語。英語 Heat line ニ対スル訳。熱ノ輻射ニ際シ, 其通路タル直線。スベテ, 太陽ノ光線トトモナツテ存在シ, 屈折率ガ小サイ故，ぼろめたあデ，ヤウヤク存在ガ認メラレルトテ, 日光すぺくとるノ赤以外ノ試験ノ場合ヒ，赤外線トモ云フ。

［新式辞典・大 1］〔理〕熱の輻射する時に通過する直線。

▷意味　英語 heat rays の訳語。　（惣郷・飛田 1986:429）

上記に挙げられた辞典の解説からは,「熱線」は「Heat ray（s)」の訳語として作られた熟語である可能性がうかがえる。ただし，ここでは一番古い例で明治 43（1910）年のものであり，これは前述した 1874 年の『輿

地新図 . 附録 乾之巻』の用例よりもかなり後の例であるので，この文献を起点として語史を辿るのは難しいであろう。

そこで，ここから先は辞書やデータベースから収集した用例を基に，独自に語史を編んでみることとしたい。

3－2 「熱線」の語史

ア 「等温線」の「同熱線」(『輿地新図．附録 乾之巻』)

「熱線」の語史を辿るに当たり，まず『日国』『国立国会図書館デジタルコレクション』『日本語歴史コーパス（CHJ)』『明治のことば辞典』から用例を収集した。その中で確認できた限りの初出例は上述した通り，1874年の『輿地新図．附録 乾之巻』(ベルゴース 著　村田文夫 訳）である。当該書内で「熱線」は以下のように用いられている。

> 第五節　地面同熱線図並ニ解
> 地球上同気候ノ地ヲ相繋クモノヲ**同熱線**（アイソセルマルラインズ）ト云フ

著者であるベルゴースはドイツ人であり原著が洋書だと考えられることを踏まえると，ここでの「熱線」は中国製ではなく日本製の訳語及び熟語であるといえるだろう。しかしながら，当該書では「熱線」は「同熱線」として用いられており，ルビに「アイソセルマルラインズ」と記されている。これは「isothermal lines」であろう。「isothermal」が「等温（線）の」を意味することと, 当該書が地理学の文献であることから, ここでの「熱線」は「赤外線」や「heat ray」の意味では用いられていないのである。よって,『輿地新図．附録 乾之巻』は熱エネルギーの意味を持つ熟語としての「熱線」の初出ではないと考えられる。

イ　物理学・熱エネルギーの「熱線」(『物理學．中篇』)

『輿地新図 . 附録 乾之巻』を除けば「熱線」の登場初期は物理学に関する文献が並んでいる。例えば 1882 年『物理學．中篇』，1886 年『小学用物理器械使用法略説』, 1888 年『物理学術語和英仏独対訳字書』などである。それぞれの文献内で「熱線」は次のように用いられている。

○〔物体ノ熱線迸射力〕凡ソ物体ノ**熱線**ヲ迸射スル力ハ甚タ不同ニシテ且ツ其表面ノ景態ニ關ス（『物理學．中篇』）（飯盛 1882：548）
○**熱線**反射凹鏡（『小学用物理器械使用法略説』）（直村 1886：79）
○ Netsusen. Heat ray〈略〉**熱線**（『物理学術語和英仏独対訳字書』1888）

続いては『輿地新図．附録 乾之巻』の次に出版された『物理學．中篇』(飯盛挺造纂譯，丹波敬三・柴田承桂校補）を見ていくこととしたい。

1882 年に出版された『物理學．中篇』は翻訳書であり，原著が存在する。雨宮氏らによれば，「1879（明治 12）年に刊行された飯盛挺造纂譯，丹波敬三・柴田承桂校補の『物理學』は大学医学部生用として，ドイツ語の教科書 5 冊を元にして編纂された教科書である」（雨宮・田中・植松 2014:26)。本稿執筆者は, 原著である「ドイツ語の教科書 5 冊」を参照し,「熱線」の基となった語を確認しようと試みた。しかし「ドイツ語の教科書 5 冊」を直接引用したのか，或いは翻訳時に複数の文献を組み合わせて再編し要約した形で使用したのかが，雨宮氏らの論文の記述では不明である。前者ならば該当部分を探せる可能性はあるものの，典拠箇所不詳の翻案である場合は該当する原語を探すことは難しいといえる。

加えて,『物理學．上篇』の例言に「本書ハ主トメ獨逸國ノ物理學者ミュルレル氏及アイゼンロール氏ノ著書ニ據テ編述シ間又ヨフマン氏・ウェルネル氏・デシャネル氏等ノ諸書ヨリ之ヲ補ヒ参フルニ編者ノ見解ヲ以テセ

リ」(飯盛 1906:1)のように典拠の説明がある通り,原著で「熱線」の基となった箇所が見つかってもそれが誰の著書によるものかは特定しにくいと考えられる。

上記のことから，科学的熱エネルギーの意味で「熱線」という熟語を最初に生み出したのは飯盛挺造である可能性が高い。今回はここまで辿ることができたが，先行研究から基にした著書の書名を探すなどして原本を確定・照合することが可能ならば，該当部分の「熱線」の原語を探すことは今後の課題としたい。

ウ 「熱線」の定着と変化

翻訳書であった『物理學．中篇』の次に出版されたのは，1886 年の『小学用物理器械使用法略説』である。当該書以降は洋書の翻訳ではなく，日本人によって著されている。このことから，1882 年の『物理學．中篇』を契機として 1886 年頃から日本で「熱線」という熟語が定着し使用が広がっていったと考えられる。

しかし現代において「熱線」という熟語は一般的には用いられず,「赤外線」という熟語に置換されている。「熱線」の定着という問題に付随して「赤外線」への移行という問題を考えるに当たり,『日国』における「赤外線」の意味記述を確認しておきたい。

○せきがい - せん［セキグヮイ‥］【赤外線】〔名〕

(｛英｝ infrared rays の訳語)

スペクトルで可視光線の赤色部の外側に現われる光線。波長が可視光線より長く，マイクロ波より短い約七五〇〇オグストロームから一万オングストロームの電磁波の総称。目には見えないが熱作用が強く，透過力も強い。医療や赤外線写真などに利用される。熱線。

＊新編中物理学〔1893〕「赤外線」

語誌　一八〇〇年，ハーシェルによって発見されたが，物体の温度を高める性質を持っているところから heat ray ともいい，明治中期までは「熱線」と直訳されていた。しかし，明治の二〇年代後半から，この光線の性質がより明らかになるにつれ，英語では infrared rays が主流となり，対訳の日本語にも直訳「赤外線」が現われ，大正期にかけて一般化した。

語誌欄に注目すると，明治 20 年代後半において「熱線」から「赤外線」へ変化した過程が記述されている。つまり，原語が「heat」から「infrared」に変化したため，よりそれに即すように訳語が再考されたことにより，「熱線」は衰退したと考えられる。それに加えて 1915 年の『電気測定：電機学校長距離教授』では「熱線型測定器」（高津 1915:62）として，「電線に電流を流して生じる熱」という意味で「熱線」が用いられる。以後は「赤外線」ではなく「熱せられた線」「熱い線」という意味での使用も増加していく。このことも手伝って，「熱線」に含まれていた「熱エネルギーを持つ光線」の意味は「赤外線」という熟語に置換され，一般化が加速していったのではないだろうか。

つまり，「熱線」は「熱エネルギーを持つ光線・赤外線」から「機器に用いられ熱を生じる，或いは熱せられた導線」といった意味に用法が変化していったと考えられる。『日国』では「赤外線」以外の意味としては「(2) 体温の変化の様子を線で示したもの」と記述されていたが，今回収集した用例及び有効データ 44 件のうち「熱せられた導線」の「熱線」が 12 件であるのに対し，「体温の変化を図示する線」は『日国』の用例 1 件のみであった。また，電熱器に使われる「熱線」の方が「体温の変化を示す線」よりも古いと推定出来るので（「電熱線」の略であるので），「熱線」の意味記述は，以下のように修正されようか。

(1)「せきがいせん（赤外線）」に同じ。熱線―＊物理學．中篇〔1882〕〈飯

盛挺造纂訳〉

(2)（「電熱線」の略）（機器に用いられ）熱を生じる，あるいは熱せられた金属線。

(3) 体温の変化の様子を線で示したもの。＊ブルジョア〔1930〕〈芹沢光治良〉

なお『日国』には「電熱線」は本文内では使用されているが，見出し語にはない。現時点では「電熱線」とその略語と推定された「熱線」（熱せられた金属線の意）の使用時期は未詳である。

エ　中国語における「熱線」

「熱線」の語史において日本で初期に確認されていた文献は，日本人の翻訳や著作による日本製であった。そこで，同じ漢字文化圏である中国では「熱線」はどのように扱われているかを確認するため，『漢語大詞典』を参照したい。『漢語大詞典』における「熱線」の記述は以下の通りである。

○【熱綫】

❶指红外线。郭沫若《人文界的日蚀》:“日蚀是不可直视的 , 太阳的一部分或者全部虽然被月影遮蔽了，但它的热线仍然强烈。”❷为了便于即时联系而经常准备着的直接连通的电话或电报线路。通常用于国家首脑之间或高级军事指挥机关之间。《新华月报》1964 年第 3 期:“他们想通过几个国家首脑之间的私用的‘热线’来解决世界上的一切问题。”　（『漢語大詞典』7:240）

上記を次のように日本語訳した。

○【ホットライン】

❶赤外線のこと。郭沫若＜人文科学における日食＞：“日食は直接

目に見えるものではなく，太陽の一部または全部が月の影で隠されているが，その熱線はまだ強い。”❷直接接続された電話や電信の回線で，すぐに連絡が取れるように用意されていることが多い。通常，国家元首の間や軍の最高司令部の間で使われる。〈新華月報〉第3号（1964年）：”彼らは，複数の国家元首の間の私的な「ホットライン」によって，世界のすべての問題を解決しようとしている。”

以上の事から,『漢語大詞典』における「熱線」の初出例は❶1936年（『人文界的日蝕』は1936年出版）❷1964年である。これは日本における初出例である1882年の『物理學．中篇』よりも後のものであり，「熱線」の定着と拡大は日本の方が先であると考えられる。

また，『日国』における「熱線」の意味記述と比較すると，❶の意味は一致しているものの，❷の意味は異なる。つまり，日本と中国では意味の変遷及び派生において異なる語史を辿ったと推測することができるだろう。

オ　現代語における「熱線」の用法

現代語において「熱線」はある分野で今も用いられているようである。その分野とはSFである。「ピクシブ百科事典」において「熱線」は以下のように記述されている。

○**熱線（ねっせん）**　高熱を伴った光線のこと。

概要

本来は赤外線を指すが，SF的な意味では「高熱を伴った光線」のことを差す。そのため創作物の世界では，稲妻状や，スペシウム光線のようなシャワー状のビームなど，本来なら赤外線では絶対に起こりえない形状（中略）の形態も登場する。

著名な熱線

・放射熱線（ゴジラシリーズ）

・ブレストファイヤー（マジンガーZ）

・グラビーム（モンスターハンターシリーズ）

関連項目

熱線銃　ビーム砲　エネルギー波　必殺技

カ 「熱線」が与えた影響

これらのことから，「熱線」の登場によって語基「熱」は科学的熱エネルギーの意味を新たに獲得し，その熟語を増加させていくようになったと解釈できるのである。

しかしここで**【表 1】**の年表に目を戻し，「熱線」以前の 1886 年に登場している「熱力学」という熟語に注目したい。この「熱力学」は**【表 1】**上では「熱線」以前に登場しているが，それはこの表が『日国』での初出例を基にして作成しているからであり，「熱線」は 1874 年の『輿地新図 . 附録 乾之巻』にも見られるため，より初期の熱エネルギーの例として相応しいと考え今回のターニングポイントとなる熟語として取り上げたということは前述の通りである。これは, 考察の結果, 真に科学的熱エネルギーの意味を持つ熟語として「熱線」が用いられ始めたのは 1882 年の『物理學. 中篇』であることを踏まえても覆らない。但しこれは今回，本稿執筆者が用例を収集した限りではという注釈はつくが，「熱力学」の用例を『日国』の他『日本語歴史コーパス（CHJ)』と『国立国会図書館デジタルコレクション』でも探したところ，前者では該当なし，後者では最も古いもので 1886 年の『小物理學書　巻 2』という結果となり, 1882 年『物理學　中篇』の「熱線」より前の用例が見つからなかったためである。

しかしながら，「熱力学」という学問名は「熱線」の上位概念であると考えられる。「熱力学」は『世界大百科事典』によれば「熱力学の第 1 法則を確立（1850）したのは R.J. クラウジウスである」とあり，1850 年に

は確立していたようである。この「熱力学」の学問的発展の影響を「熱線」も受けているのではないだろうか。つまり,「熱線」以前に「熱力学」が出現し,「熱線」という翻訳語に影響を及ぼした可能性もある。従って「熱線」と「熱力学」の前後関係及び影響関係を確認する必要があり，今後の課題としたい。

4　意味の分類と記述の改編案

以上の考察を踏まえて『日国』の字音語素の意味記述を改編し，その意味の順番を歴史的変遷を考慮して配列すると次のようになる（新たな配列番号はローマ数字で示す)。

（Ⅰ）**《皮膚感覚的に感じる温度・気候》**あつい。あつさ。高温。　←旧意味番号(1)

（Ⅰ - ⅰ）気候。大気・空気の温度。

（Ⅰ - ⅱ）自然物の温度。

（Ⅱ）**《生物の身体温度》**身体温度の高さ。病気による高熱。　←同(3)

（Ⅲ）**《心理的集中・精神的興奮》**人間の精神的働きとしての心理的集中や情熱。　←同(4)

（Ⅲ - ⅰ）あつい気持ち・心・精神。気炎。気勢。

（Ⅲ - ⅱ）興奮する。夢中になる。

（Ⅲ - ⅲ）ある具体的な行為に集中して打ち込む。

（Ⅲ - ⅳ）何かの行為・対象に対する情熱。

（Ⅳ）**《科学的熱エネルギー》**温度を高める力。熱エネルギー。　←同(2)

（Ⅳ - ⅰ）事物が持っている熱エネルギー。

（Ⅳ - ⅱ）動きを伴って生じる熱エネルギー。

上記の意味記述に従って，該当する熟語を，その熟語の初出例を付して

改めて記述すると，漢語語基「熱」の意味と歴史的変遷は以下のように改編される（各熟語の資料と用例は『日国』により，熟語はそれぞれの意味分類ごとに初出年の古い順から原則として３例程を選抜してあげている）。

（Ⅰ）《皮膚感覚的に感じる温度・気候》あつい。あつさ。高温。

（Ⅰ-ⅰ）気候。大気・空気の温度。

炎熱―＊文華秀麗集〔818〕中・扈従梵釈寺〈淳和天皇〉「君王機暇倦**炎熱**，午後尋真幸日宮」

＊乾坤弁説〔1656〕亨・一六「此硫黄の性は則**炎熱**にして燥也」

焦熱―＊往生要集〔984 ～ 985〕大文一「第一地獄亦分為八。一等活，二黒縄，三衆合，四叫喚，五大叫喚，六**焦熱**，七大**焦熱**，八無間」

＊平家物語〔13 C 前〕五・奈良炎上「猛火はまさしうおしかけたり。おめきさけぶ声，**焦熱**・大**焦熱**・無間阿毘（むけんあび）のほのをの底の罪人も，これにはすぎじとぞみえし」

暑熱―＊正法眼蔵〔1231 ～ 53〕行持・下「**暑熱**をおづることなかれ，**暑熱**いまだ人をやぶらず，**暑熱**いまだ道をやぶらず」

（その他の熟語の用例と年代はいま略す）―余熱，寒熱，熱気，熱帯，酷熱，冷熱，熱量，白熱，高熱など。

（Ⅰ-ⅱ）自然物の温度。

熱鉄―＊往生要集〔984 ～ 985〕大文一「獄卒執罪人，臥**熱鉄**地，以**熱鉄**縄，縦横身」

＊百座法談〔1110〕三月九日「そらよりねっ鉄のまうてきてうへにおちかかるとおもふに」

熱湯―＊本朝文粋〔1060 頃〕一二・鉄槌伝〈羅泰〉「況復治淫水而有功。掬**熱湯**而無傷」

＊正法眼蔵〔1231 ～ 53〕洗浄「廁中の洗浄には，冷水をよろ

しとす。**熱湯**は腸風をひきおこすといふ」

熱風―＊叢書本謡曲・愛宕空也〔1516 頃〕「此の仏舎利を保つならば，熱気**熱風**金翅鳥の，三つの苦みをまぬかるべし」

（その他の熟語の用例と年代はいま略す）―火熱，熱砂，熱血，熱火など。

（Ⅱ）《生物の身体温度》身体温度の高さ。病気による高熱。

熱気―＊小右記 - 長和五年〔1016〕五月一一日「口乾無力，但食不減例，医師等云，**熱気**歟者」

＊御湯殿上日記 - 天正七年〔1579〕二月一〇日「よへより御心わろく御ねっきありて，竹た御みゃくにまいりて，御くすりまいる」

発熱―＊全九集〔1566 頃〕三「香蘇散四時の傷寒頭痛**発熱**してそそろさむきを治す」

寒熱―＊御伽草子・猿源氏草紙〔室町末〕「それやまひといふものは，**かんねつ**ふたつよりおこりて，五たいをくるしむるなり」

熱線―＊ブルジョア〔1930〕〈芹沢光治良〉―「沢のプヌモは益々成功し，喀痰もなくなり，**熱線**は高低なく，体重表の線のみ昇った」

（その他の熟語の用例と年代はいま略す）―微熱，低熱，猩紅熱，高熱，解熱，産褥熱，病熱，熱感，平熱，黄熱病など。

（Ⅲ）《心理的集中・精神的興奮》人間の精神的働きとしての心理的集中。

（Ⅲ - ｉ）あつい気持ち・心・精神。気炎。気勢。（“強い・激しい”情感）

【主に名詞用法】【形容詞用法＋体言】

熱血―＊宝覚真空禅師録〔1346〕乾・信州諏方白華山慈雲禅寺語録「揮嗔拳噴**熱血**，則且恕最耐」

＊雪中梅〔1886〕〈末広鉄腸〉序「熱血を吐露して著述したる書籍も」

熱気―＊ぎやどぺかどる〔1599〕上・二・八「煩悩の火を消し，邪なる貪欲の**熱気**をさまし，かはきたる心を潤し涼しむる故也」

熱腸―＊玩鴎先生詠物雑体百首〔1794〕湯婆「婆心情最切, 自似**熱腸人**」

＊時勢に感あり〔1890〕〈北村…透谷〉「**熱腸**（ネッチョウ）なる者，徒らに憤ふり」

（その他の熟語の用例と年代はいま略す）―熱心，熱涙，熱情，熱意，熱誠など。

（Ⅲ - ⅱ）興奮する。夢中になる。【動詞としても使用される。非「熱」部分の漢字に動作性の意味は希薄】

熱中―＊布令字弁〔1868 ～ 72〕〈知足蹄原子〉四「**熱中** ネッチウ ムネガイキレル」

熱心―＊開化本論〔1879〕〈吉岡徳明〉「方今洋学に**熱心して**，皇国男子心胆を奪はれたる者は」

冷熱―＊東京日日新聞 - 明治二九年〔1896〕一一月一三日「皆伯と親善にして交情の**冷熱**なきを述べ」

熱烈―＊青春〔1905 ～ 06〕〈小栗風葉〉秋・一二「恋愛の欲求が他の有らゆる慾望に比べて最も**熱烈な**のも，我々の真性が不死不滅に活きんとするからで」

（Ⅲ - ⅲ）ある具体的な行為に集中して打ち込む（こと）【行為】【副詞用法＋動作性体言（～する）】

熱愛―＊西国立志編〔1870 ～ 71〕〈中村正直訳〉一一・二七「これ何物ぞや，学問を**熱愛する**の心なりと云り」

熱望―＊自由太刀余波鋭鋒〔1884〕〈坪内逍遙訳〉一「輿論が彼を推尊して，自由の恢復を**熱望し**，窃かに義挙を催（うな）がす如く」

熱狂―＊詩辨〔1891〕〈内田魯庵〉「古代文字未だ有らざりし時，木を鳴し石を敲き乱雑の調を作りて**熱狂**（ネッキャウ）せしより次第に進化して終に今日の韻法を作りしなり」

熱願―＊竹沢先生と云ふ人〔1924 ～ 25〕〈長与善郎〉竹沢先生の花見・二「只**熱願**のみに燃ゆる者は却って真の天命を完うし得ない」

＊ユリアとよぶ女〔1968〕〈遠藤周作〉「藤津，彼杵，杵島の三郡を幕府から返してもらいたいとかねてから**熱願して**いた」

（その他の熱語の用例と年代はいま略す）―熱弁，熱演など。

（Ⅲ - ⅳ）何かの行為・対象に対する情熱・意気込み・熱意。（「〇〇＋熱」）

【接尾辞的用法】

投機熱―＊国民新聞 - 明治三〇年〔1897〕一月三日「銀行増設の結果互に競争して顧客を得むとしたりしと，**投機熱**に襲はれて各営業人が妄りに投機事業に手を出すに至りたるとは」

政治熱―＊政治小説を作るべき好時機〔1898〕〈内田魯庵〉「伊陸松樺等の元老が所謂人才を頻りに抜擢せし以来両三年**政治熱**（セイヂネツ）は次第に活機を生じ」

宗教熱―＊仏国風俗問答〔1901〕〈池辺義象〉新年の出来事「英国米国等に比して，**宗教熱**やや冷却せりといふのみ」

（その他の熱語の用例と年代はいま略す）―登山熱，旅行熱，創作熱，戦争熱，事業熱，野球熱など。

（Ⅳ）《科学的熱エネルギー》温度を高める力。熱エネルギー。

（Ⅳ - ⅰ）事物が持っている熱エネルギー。

太陽熱―＊改正増補物理階梯〔1876〕〈片山淳吉〉中・二一「温は〈略〉其本原となるもの七種あり，第一は**大陽熱**第二は地心熱第三は火熱第四は電気第五は肉身熱第六は化成熱第七は相撃

熱是なり」

熱線―＊物理學．中篇〔1882〕〈飯盛挺造纂訳〉「〔物体ノ熱線逆射力〕凡ソ物体ノ**熱線**ヲ逆射スル力ハ甚タ不同ニシテ且ツ其表面ノ景態ニ關ス」

熱力学―＊工学字彙〔1886〕〈野村龍太郎〉「Thermodynamics **熱力学**」

熱機関―＊工学字彙〔1886〕〈野村龍太郎〉「Caloric engine **熱機関**」

（その他の熟語の用例と年代はいま略す）―熱化学，潜熱，火熱，地熱，熱量，電熱，熱源，耐熱，熱効率，熱管理，熱処理など。

（Ⅳ - ⅱ）動きを伴って生じる熱エネルギー。

潜熱―＊工学字彙〔1886〕〈野村龍太郎〉「Latent heat **潜熱**」

燃焼熱―＊稿本化学語彙〔1900〕〈桜井錠二・高松豊吉〉「Heat of combustion. Verbrennungs wärme，f **燃焼熱**」

融解熱―＊稿本化学語彙〔1900〕〈桜井錠二・高松豊吉〉「Heat of fusion. Schmelzungswärme，f **融解熱**」

（その他の熟語の用例と年代はいま略す）―輻射熱，放熱，熱電対，熱電流，熱解離，熱拡散，熱伝導など。

5　語基「熱」の熟語全リスト

最後に，ここでは今後の追加調査のため，『日国』やネットの熟語検索サイト（複数）で収集し得た「熱」の熟語一覧を語構成別に列挙しておくことにする。

その全リストの中で，「熱線」「熱力学」「太陽熱」以外で，「熱」の意味変化上，重要な鍵となる熟語候補としては，以下のものがあげられる。

○熱帯　熱学／電気－熱　熱－電気　熱－機関　熱－化学　原子－熱　生成－熱　反応－熱　実－熱量

このうち２字漢語の「熱学」は「熱力学」の上位概念である研究領域名であり,「熱帯」については荒川清秀氏の一連の研究が知られている通りである。その他は３字漢語であるので,そのうち「電気熱」「熱電気」の「電気」については安部（2021）に研究史を含め取り上げられているが，それぞれ「熱」以外の２字漢語の部分の語史研究と関わってくることになる。

◆全熟語一覧（2字漢語･3字漢語）――― 下線はサ変の例あるもの。例：熱飲（熱燗ほかを飲むこと）

①「熱～」

熱湯　熱火　熱燗　熱熱　熱海　熱田　熱麦　熱中　熱傷　熱唱　熱情　熱心　熱戦　熱湯　熱闘　熱波　熱烈　熱望　熱量　熱弁　熱風　熱病　熱雲　熱延　熱塊　熱核　熱学　熱型　熱圏　熱砂　熱水　熱性　熱線　熱帯　熱鉄　熱雷　熱涙　熱論　熱愛　熱意　熱演　熱感　熱汗　熱願　熱気　熱球　熱狂　熱血　熱源　熱死　熱暑　熱金　熱壁　熱事　熱汁　熱茶　熱流　熱鍋　熱鋸　熱灰　熱震　熱坊　熱蒸　熱飯　熱奴　熱玉　熱者　熱物　熱飲　熱炎　熱焔　熱送　熱喝　熱叫　熱苦　熱光　熱好　熱冷　熱賛　熱志　熱時　熱腫　熱症　熱信　熱請　熱石　熱舌　熱泉　熱素　熱瘡　熱地　熱衷　熱腸　熱聴　熱痛　熱低　熱天　熱度　熱投　熱鬧　熱祷　熱読　熱悩　熱罵　熱発　熱日　熱服　熱沸　熱憤　熱辯　熱慕　熱麺　熱薬　熱草　熱河　熱国　熱盛　熱誠

②「～熱」

御　熱　黄熱　温熱　炎熱　粗熱　火熱　過熱　寒熱　強熱　急熱　狂熱　口熱　酷熱　極熱　午熱　産熱　遮熱　灼熱　焦熱　暑熱　赤熱　腺熱　足熱　地熱　頭熱　耐熱　蓄熱　断熱　白熱　発熱　廃熱　排熱　比熱　放熱　微熱　余熱　予熱　冷熱　加熱　伝熱　電熱　解熱　光熱　高熱　情熱　平熱　秋熱　暗熱　稲熱　厩熱　懊熱　悪熱　面熱　鏡熱　赫

熱　渇熱　夏熱　瓦熱　逆熱　虚熱　草熱　劇熱　下熱　顕熱　紅熱　炸熱　散熱　残熱　湿熱　実熱　熾熱　炙熱　射熱　邪熱　生熱　消熱　溽熱　初熱　心熱　燥熱　雑熱　底熱　体熱　暖熱　中熱　潮熱　土熱　低熱　動熱　鬧熱　内熱　八熱　跳熱　煩熱　人熱　病熱　風熱　伏熱　沸熱　奮熱　偏熱　防熱　無熱　物熱　労熱　苦熱　三熱　蒸熱　身熱　泉熱　潜熱　大熱

③「**熱～～**」

熱移動　熱陰極　熱運動　熱応力　熱汚染　熱回収　熱界雷　熱解離　熱化学　熱拡散　熱関数　熱含量　熱機関　熱気球　熱器具　熱気泡　熱凝固　熱狂的　熱気浴　熱血漢　熱月震　熱効率　熱互変　熱雑音　熱視線　熱射病　熱重合　熱収支　熱消磁　熱情的　熱処理　熱赤道　熱蔵庫　熱帯魚　熱帯湖　熱帯鳥　熱帯病　熱帯夜　熱対流　熱帯林　熱中症　熱電子　熱電堆　熱伝達　熱電対　熱伝導　熱電能　熱天秤　熱電離　熱電率　熱電流　熱電列　熱媒体　熱風炉　熱輻射　熱分解　熱平衡　熱放射　熱暴走　熱膨張　熱容量　熱力学　熱量計　熱漏斗　熱沸瘡　熱田祭　熱風呂　熱湯好　熱愛者　熱管理　熱現象　熱座浴　熱情家　熱心家　熱心者　熱水液　熱性病　熱帯樹　熱帯性　熱帯日　熱中家　熱鉄丸　熱鉄棒　熱鉄輪　熱電気　熱病病　熱分析　熱膨脹　熱量食　熱烈家　熱河省　熱海市

④「**～熱～**」

亜熱帯　稲熱病　黄熱病　加熱炉　感熱紙　加熱器　過熱器　解熱剤　光熱費　好熱菌　黒熱病　情熱的　断熱材　白熱的　発熱量　比熱比　不熱心　放熱器　放熱板　温熱性　電熱器　圧熱釜　稲熱田　大熱熱　大熱心　狂熱的　屈熱性　向熱性　実熱量　灼熱的　情熱家　消熱剤　趨熱性　青熱脆　走熱性　耐熱鋼　耐熱性　大熱病　蓄熱器　蓄熱室　知熱灸　透熱

灸　鬧熱場　透熱性　廃熱罐　廃熱缶　白熱化　白熱灯　白熱套　放熱筒　無熱池　無熱天　予熱炉　解熱薬

⑤「〜〜熱」

五日熱　内断熱　液化熱　解離熱　夏季熱　間欠熱　回帰熱　気化熱　吸収熱　凝固熱　吸着熱　金属熱　稽留熱　呼吸熱　黒水熱　枯草熱　混合熱　産褥熱　七島熱　弛張熱　温潤熱　昇華熱　猩紅熱　浸漬熱　水和熱　生成熱　外断熱　堆積熱　太陽熱　知恵熱　地中熱　中和熱　転移熱　燃焼熱　波状熱　反応熱　非加熱　輻射熱　崩壊熱　放射熱　発疹熱　摩擦熱　三日熱　融解熱　溶解熱　希釈熱　一日熱　欧化熱　鸚鵡熱　化学熱　飢餓熱　企業熱　結晶熱　好奇熱　肥稲熱　再帰熱　塹壕熱　事業熱　紫斑熱　宗教熱　消耗熱　青雲熱　政治熱　戦争熱　創作熱　大焦熱　炭疽熱　電気熱　天龍熱　投機熱　徳島熱　読書熱　土佐熱　土地熱　排日熱　発黄熱　反射熱　日向熱　分解熱　文学熱　分子熱　麻雀熱　野球熱　流行熱　凝縮熱　原子熱　湿潤熱　蒸発熱

6　参考文献一覧

ベルゴース著・村田文夫訳（1874）『輿地新図．附録 乾之巻』
飯盛挺造纂譯・丹波敬三，柴田承桂校補（1882）『物理學．中篇』
直村典編・後藤牧太閲（1886）『小学用物理器械使用法略説』文部省編輯局
飯盛挺造纂譯・丹波敬三，柴田承桂校補（1906）『物理學．上篇』丸善書店
惣郷正明･飛田良文（1986）「熱線」『明治のことば辞典』, 東京堂出版, p.429
荒川清秀（1987）「訳語「熱帯」の起源をめぐって―日中両語の漢字の造語力」『日本語学』6―2，明治書院，pp.70-84
高津清著・電気学校編（1915）『電気測定 : 電機学校長距離教授』電機学校
白川静（1996）『字通』平凡社

荒川清秀（1997）「『熱帯』の『起源』は『職方外記』か」『近代日中学術用語の形成と伝播―地理学用語を中心に』，白帝社，pp.32-76
沈国威（2002）「訳語は如何に継承されたのか:『熱帯, 温帯, 寒帯』再考」『関西大学東西学術研究所紀要』35，関西大学東西学術研究所，pp.39-53
雨宮高久・田中啓介・植松英穂（2014）「明治・大正・昭和時代の物理教科書における力の単位・計量・概念」『計量史研究』36（1），pp.23-35
『漢語大詞典』（1986 ～ 1994）漢語大詞典出版社
『世界大百科事典』（2014）平凡社
ピクシブ百科事典「熱線（ねっせん）とは」2014 年 12 月 3 日更新，https://dic.pixiv.net/a/%E7%86%B1%E7%B7%9A　2021 年 11 月 17 日閲覧

第 3 章　漢語語基「供」の歴史的研究――神仏へ「そなえる」から「供給（Supply）」と「口供」へ

佐藤莉乃・安部清哉

1. はじめに ―対象が神仏に限定されない「供給」へ

「供」という漢字を目にしたとき，どのような意味を思い浮かべるだろうか。「お供え」など「そなえる」という意味が思い浮かぶ一方で,「供給」や「提供」の「供」を連想する人も多くいるだろう。

日本における「供」の意味変遷を辿ると，古くは神仏に対して供えるという意に限定され，日常的によく用いられる「供給」や「提供」の用法が見られるのは近代以降であることが明らかになる。また，それと同時期に「口供」など「述べる」という意味の熟語が出現していることがわかる。本稿では，日本において漢字「供」が神仏関係に限らない意で用いられるようになった経緯と，同時期に登場する「供述」などの「述べる」という

意について調査し，語基「供」の意味の変遷を考察したい。

まずは，『日本国語大辞典』（以下『日国』と略記）における「供する」，また「供給」の一般的な意味を確認しておく。

○きょう - ・する【供】〔他サ変〕きょう・す〔他サ変〕

(1) そなえる。ささげる。たてまつる。きょうず。

(2) さし出す。提供する。きょうず。

(3) 用に立つように整える。役立てる。用いる。きょうず。

○きょう - きゅう［‥キフ］【供給】

(1) 物を与えること。提供すること。ぐきゅう。古くは，多く「ぐきゅう」と読んだ。→ぐきゅう（供給）。

(2) 市場の需要に応じて，財・サービスを価格の支払いと交換に引き渡すこと。また，その出す分量。需要。

2 「供」の文字史―「供」の意味変遷―

2－1『字通』における「供」の字源的意味

漢字「供」の文字史を辿るに当たり，まず字源的意味を確認しておく必要がある。『字通』には以下のように記述されている。

○「供」8画 2428　字音キョウ・ク　字訓そなえる　同訓異字すすめる・そなえる　（説文解字　略）

字形　形声

声符は共（きょう）。共は両手でものを奉ずる形で，供の初文。〔説文〕八上に「設くるなり」と供設の意とし，「一に曰く，供給するなり」という。金文に共を供・恭の意に用い，恭にはまた龔（きょう）の字を用いる。共は玉器を奉ずる形，龔は（龍）形の呪器を奉ずる形であろう。

訓義　[1] そなえる，もうける。
　　[2] まつる，すすめる。
　　[3] つかえる，やしなう。
　　[4] つつしむ，うやうやしい。
　　[5] のべる，もうす。

古辞書の訓

〔名義抄〕供　マウク・タテマツル・ソナフ・ツカマツル・ノゾム・タマフ

〔字鏡集〕供　マウク・タテマツル・ツカフマツル・ツブサニ・アヘ・ソナフ・ノゾム・タマ

この『字通』に従えば,「供」は，元は神事に関する供設の意であったことがうかがえる。

2－2「供」の字音語素

語基「供」の『日国』における字音語素を改めて確認しておく。字音語素における意味分類は以下の通りである（熟語例もそのまま掲載)。

(1) 神仏にそなえる。もてなす。／供薦，供応／供花／

(2) 役立てる。さし出す。／提供，供給，供出，供進，供与／供託，供用，供覧／供血，供米／

(3) 問に答える。白状する。述べる。／供述／口供，自供／

字音語素においても (1) に神仏に対する「そなえる」という意味が第一に示されている。そして (2) には神仏に限らずさまざまな対象に対して「役立てる」「さし出す」という意味が，さらに (3) には「問に答える」「白状する」など「言う」「述べる」という (1) (2) とは大きく異なる意味が示されている。

2－3　語基「供」の熟語の読みのユレ

2－3－1「(供) 応」におけるオウ／ヨウ)

字音語素に示されている各熟語には異なる表記や読みを持つものもあるため，表記と読みの違いにより，それぞれの意味を細かく区別していく必要がある。

まず,「(供) 応」におけるオウかヨウかの問題がある。意味番号 (1)「供応」は『日国』において表記に「饗応／享応／供応」が，読みには「キョウオウ／キョウヨウ」が確認される。例えば『日国』記載の見出し「供応」において，その用例の多くは表記「饗応」か「享応」であり，用例の表記自体が「供応」である初出例としては,「＊ある小官僚の抹殺〔1958〕〈松本清張〉」まで下る（中国の「＊福恵全書 - 任部・革陋規「如衝劇之区，供応浩繁」」の例はある)。なお,「キョウヨウ」の読みの「饗応」の見出しにて，その意味（2）では「＊能因本枕草子〔10 C終〕」から, また「饗応」（キョウオウ）としては「キョウオウ（饗応・享応・供応)」の見出しの中の意味（2）で「＊明衡往来〔11 C中か〕」からある。また,「語誌」欄に次のような記述がある。

語誌「饗応」

(1) 中国古典においては「響きが声に応じて起こるように，人の言葉や行動にすばやく反応すること」という意味で「響応」と書かれ，これが原義とされる。

(2) 日本においては原義から（1）の意味が生じ，また,「相手を喜ばせる」という部分に重点が移った結果，（2）の意味が派生し，それに伴って「響」が「饗」と書かれるようになった。「供」は現代表記における代用字。

また同じ見出し内に「享応」の表記では「＊米欧回覧実記〔1877〕」があるが，この「享応」の例は『日国』の本文検索によればすべて「＊米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉」であったので，久米個人の書き癖である可

能性が高いと考えられる。歴史的変遷としては「饗応」「享応」の表記例での歴史も考慮する必要がある。

また，意味番号（2）「供給」には，（グキュウ）と（キョウキュウ）の二つの読み方があるが，前者（グキュウ）の初出年は 730 年であり，後者（キョウキュウ）の初出年は 1874 年と大きく差がある。「供給（グキュウ）」の用例は 730 年の『続日本紀』に見られ，「供給（キョウキュウ）」の初出例は 1874 年の『小学読本』である。『日国』の「供給（キョウキュウ）」の意味番号（1）には「供給（グキュウ）」とほぼ同じ意味の記述があり，さらに「古くは, 多く「ぐきゅう」と読んだ。」とある。「供給（キョウキュウ）」は意味番号（2）まであるが，その意味は「市場の需要に応じて，財・サービスを価格の支払いと交換に引き渡すこと。また，その出す分量。需要。」である。

2－3－2「供」におけるグ／キョウ

次に，「供進」においても（キョウシン）と（グシン）の 2 つの読みがある。『日国』における「供進（キョウシン）」は 891 ～ 911 年頃の『紀家集』に初出例が見られる。意味は，意味番号（1）と（2）に分類されているが，（1）に「天子に献上すること。ぐしん。」，（2）に「神に幣帛（へいはく）を供えること。」とあり，どちらも天子や神に献上するという意味合いが強いことに注意したい。また,「供進」（グシンの読み）の意味は,「神に供え物を奉ること。」とのみあり，初出は『日本書紀桃源抄』に確認され，それは 15C 後半であった。語基「供」を「グ」と読む用例は古いものが多い傾向にあるが，その一方で「供進」においては「キョウ」と読む用法が古く，さらにそれぞれの意味に大きな差がないことを確認したい。

3 章の**【表 1】**は，以上の点を整理し,「供応」（饗応，享応）「供給」「供進」の読みと意味毎の『日国』での初出年を記載したものである。

「キョウオウ」については，語源とされている「響応」を含めると以下

の変遷があったことになる（括弧内は『日国』における初出年である）。

○「響応」（『史記』などの中国古典／日本の初出は 1725 年頃）→「饗応」（11C 中か）→「享応」（1877）（久米他個人の書き癖か一時的表記か）→「供応」（1958）

【表 1】語基「供」の熟語における「キョウ／グ」「オウ／ヨウ」の表記と読み

読み		意味番号(1)	意味番号(2)
キョウヨウ	饗応	○(1)「きょうおう(饗応)(1)」に同じ。	◎(2)「きょうおう(饗応)(2)」に同じ。＊能因本枕草子〔10 C終〕
キョウヨウ	供応		
キョウヨウ	享応		
キョウオウ	饗応	○（1）相手の意にさからわないで迎合すること。へつらうこと。また，下へもおかないで扱うこと。きょうよう。＊大鏡〔12 C前〕四・道隆「『ふさはしからずにくし』とは思はれけれど，その座にては饗応し申してとりあらそひけり」	◎（2）酒や料理をとりそろえてもてなすこと。馳走すること。きょうよう。＊明衡往来〔11 C中か〕上本「已以無饗応。依厭人被忘花」
キョウオウ	供応		◎（2）酒や料理をとりそろえてもてなすこと。馳走すること。きょうよう。＊ある小官僚の抹殺〔1958〕〈松本清張〉二「業者から料理屋で供応をうけたのは収賄の疑いが濃い」＊福恵全書 - 任部・革陋規「如衝劇之区，供応浩繁」
キョウオウ	享応		◎（2）酒や料理をとりそろえてもてなすこと。馳走すること。きょうよう。＊米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉二・二二「浮波戸の前に，当府の知事（メヨ）より享応にて，馬車を装ふて待つ」
キョウオウ	響応	●響きが声に応ずるように，他の言動にすぐに従い応ずること。＊白石先生手簡〔1725 頃〕三「婚姻の二字あらはれ候事，誠に響応のごとく肝をつぶしたる事に候き」＊史記 - 淮南王安「一倡，天下不期而響応者，不可勝数也」	
グキュウ	供給	△求めに応じてそなえあてがうこと。提供すること。また，そのもの。＊続日本紀 - 天平二年〔730〕七月癸亥「詔曰，供給斎宮年料」	

キョウキュウ	供給	△ (1) 物を与えること。提供すること。ぐきゅう。古くは，多く「ぐきゅう」と読んだ。→ぐきゅう (供給) ＊小学読本〔1874〕〈榊原・那珂・稲垣〉四「昼は我が食の半を遺り，夜は我が臥床に寝させて供給しおきたれども」＊礼記 - 曲礼上「祷祠祭祀，供給鬼神，非礼不誠不荘」	▲ (2) 市場の需要に応じて，財･サービスを価格の支払いと交換に引き渡すこと。また，その出す分量。需要。＊米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉一・一三「運搬して市場に価を得て，需用の人に供給を遂くるを以て，其終功とす」
グシン	供進	▽神に供え物を奉ること。＊日本書紀桃源抄〔15 C 後〕「其稲を以て，十一月の中卯日官の庁にをいて，天地神殿を作て，天子の手親（てづからみづか）ら供進して祭るを大嘗会と云」	
キョウシン	供進	▽ (1) 天子に献上すること。ぐしん。＊紀家集〔891 ～ 911 頃〕一四・昌泰元年歳次戊午十月廿日競狩記「一刻許，供進御膳，侍臣等遍賜食」＊北史 - 王世充伝「世充為秘之，又遽簡閲以供進」	▽ (2) 神に幣帛（へいはく）を供えること。

＊【表 1】においては，記号毎に意味を分類している。
▽：神に対して供える。奉る。献上する。
○：相手の意に逆らわないで迎合すること。
◎：酒や料理をもてなすこと。
△：物を与えること。提供すること。
▲：需要に応じた供給。
『日国』の用例によれば，「キョウオウ」に関しては「饗応」のみ○と◎の両方の意味を持ち，「享応」と「供応」には◎の意味の用例しか見られなかった。「享応」においては，『日国』の全文検索を用いても久米邦武氏の用例のみであったため，久米氏特有の表記であった可能性もある。「供進」においては「グシン」「キョウシン」どちらの読み方であっても▽の意味で用いられている。

以上の表記と読みについての問題を踏まえた上で，上記の意味記述及びそれぞれの意味分類ごとの漢語熟語の出現年代を照合しつつ，全体的意味の変化・推移を通時的視点から考察すると，『日国』の字音語素における記述は意味分類が年代順でない可能性が高く，また（2）は意味用法に基づいてさらに分類できると考えられる。

3　語基「供」の基本熟語の歴史的変遷

3 － 1「語基「供」の基本熟語の初出年順年表」

3 章の**【表 2】**は，『日国』の字音語素欄にある熟語それぞれを『日国』

【表 2】語基「供」の熟語の初出年順年表（『日本国語大辞典』による）

意味分類	改編（Ⅰ）神仏・天皇など身分の高い対象にそなえる。			Ⅰ	Ⅰ				
	改編（Ⅱ）－①役立てる。さし出す。(対象が神仏・皇族など高い身分)	Ⅱ－①	Ⅱ－①			Ⅱ－①			
	改編（Ⅱ）—②役立てる。さし出す。(身分に制約がない)						Ⅱ－②		Ⅱ－②
	改編（Ⅲ）問に答える。白状する。述べる。							Ⅲ	
字音語素の意味	(1) 神仏にそなえる。もてなす。(2) 役立てる。さし出す。(3) 問に答える。白状する。述べる。	2	2	1	1	2	2	3	2
熟語	熟語（ヨミが問題になる語形）	供給（ゲキュウ）	供進（キョウシン）	饗応（キョウヨウ）	饗応（キョウオウ）	供進（グシン）	供給（キョウキュウ）	口供	供用
	中国文献		■北史 - 王世充伝		■福恵全書 - 任部・革陋規		■礼記 - 曲礼上	■未信篇	
奈良	730	□							
平安	891-911		□						
	10C 後			○（2）（きょうおう（饗応）(2)に同じ）					
	11C 中				□（2）				
	1120	○							
	12C 前				○（1）				
鎌倉	1331				○（2）				
室町	15C 後					○			
明治	1874						○（1）		
	1874							○（2）	
	1875								○
	1877								
	1877						○（2）		
	1883-1884								
	1885								
	1885-1886							○（1）	
	1890								
	1890								
昭和	1957								
	1958								
	1958								

意味分類	改編（Ⅰ）神仏・天皇など身分の高い対象にそなえる。	Ⅰ						Ⅰ	
	改編（Ⅱ）－①役立てる。さし出す。(対象が神仏・皇族など高い身分)								
	改編（Ⅱ）—②役立てる。さし出す。(身分に制約がない)		Ⅱ－②	Ⅱ－②	Ⅱ－②		Ⅱ－②		
	改編（Ⅲ）問に答える。白状する。述べる。					Ⅲ			Ⅲ
字音語素の意味	(1) 神仏にそなえる。もてなす。(2)役立てる。さし出す。(3)問に答える。白状する。述べる。	1	2	2	2	3	2	1	3
熟語	熟語（ヨミが問題になる語形)	享応	供出	提供	供託	供述	供与	供応	自供
	中国文献							■福恵全書 - 任部・革陋規	
奈良	730								
平安	891-911								
	10C 後								
	11C 中								
	1120								
	12C 前								
鎌倉	1331								
室町	15C 後								
明治	1874								
	1874								
	1875								
	1877	○ (2)							
	1877								
	1883-1884		○						
	1885			○ (1)					
	1885-1886								
	1890				○				
	1890					○			
昭和	1957						○		
	1958							○ (2)	
	1958								○

で確認し，さらにその熟語における意味別の用例の初出年によって，熟語出現時期をまとめたものである。

まず，最も古い熟語の年代を確認すると，「供給（グキュウ）」の 730 年であるため，「供給（グキュウ）」が該当する字音語素での意味番号「(2) 役立てる。さし出す。」が一番古いと考えられる。

また，字音語素において（2）に該当する中で初出年が古い「供給（グキュウ）」「供進（キョウシン）」「供進（グシン）」は，神仏や天皇（天子，斎宮ほか）に対して供えるという意で用いられる。一方で「供給（キョウキュウ）」「提供」「供与」などその他の熟語では，その対象を神仏や皇族関係ほかの身分の高い存在に限定していない。さらに，後者の熟語の初出年は 1870 年代以降であり，前者と後者のそれぞれの熟語の初出年には室町以前と明治以降という年代的隔絶が認められる。このように，一つの熟語の中であっても表記や読みの違いにより意味の変遷が見られることがわかる。また，後者の用例の出現とほぼ同時期に意味番号（3）「問に答える。白状する。述べる。」という新しい用法が生まれ，意味が拡大したと推察される。

3－2　歴史的変遷を踏まえた『日国』意味の分類と記述の改編案

以上の表記と読みの問題や語基「供」の歴史的変遷を考慮して，『日国』字音語素の意味記述を改編すると次のようになる（新たな配列番号はローマ数字で示す）。

（Ⅰ）役立てる。さし出す。　――旧分類(2)

（Ⅰ）－①（対象が神仏・皇族など高い身分）

［「供給グキュウ」『続日本紀』（730）］

［「供進キョウシン（1）『紀家集』（891 ～ 911）］

［「供進グシン」『日本書紀桃源抄』（15C 後）］

（Ⅰ）―②（身分に制約がない）

［「供給キョウキュウ」（1）『小学読本』（1874）（2）『米欧回覧実記』（1877）］

［「供用」『地方官会議日誌－九・明治八年』（1875）］

［「供出」『経国美談』（1883 ～ 84）］

（Ⅱ）神仏・天皇など身分の高い対象にそなえる。そのような対象をもてなす。　――旧分類(1)

［「饗応キョウヨウ」の表記段階『能因本枕草子』（10C 終）］

［「饗応キョウオウ」の表記段階　（2）『明衡往来』（11C 中か），（1）『大鏡』（12C 前）］

［「享応キョウオウ」の表記段階　（2）『米欧回覧実記』（1877）］

［「供応キョウオウ」の表記段階　（2）『ある小官僚の抹殺』（1958）］

（Ⅲ）問に答える。白状する。述べる。――旧分類(3)

［「口供」（1）『当世書生気質』（1885 ～ 86）］（2）『明六雑誌－一〇号』（1874）］

［「供述」『刑事訴訟法』（1890）］

［「自供」『ある小官僚の抹殺』（1958）］

4 『大漢和辞典』と『漢語大詞典』における「供」の意味比較

次に,『大漢和辞典』と中国の代表的な漢語辞典の一つである『漢語大詞典』を比較する。3 章の**【表 3】**は，その二つの辞典と,『日国』の字音語素と単独用法における語基「供」との意味記述を比較できるように,『大漢和辞典』を基準に対照表にまとめたものである。

【表 3】漢字「供」―『大漢和辞典』『漢語大詞典』『日国』の意味比較

		大漢和辞典	日本国語大辞典の字音語素	漢語大詞典（カッコ内は拙訳）	日国の音読みでの単独用法【供（グ）】
1	○	㈠まうける。供給する。そなへる。又其のもの。	(2) 役立てる。さし出す。／提供，供給，供出，供進，供与／供託，供用，供覧／供血，供米／	④奉献，進献⑦祭品，供物（④進呈する。献上する。⑦生贄，供物。）	そなえもの。供物。ぐう。
2	×	㈡すすめる。			
3	○	㈢まつる。	(1) 神仏にそなえる。もてなす。／供薦，供応／供花	⑤祭祀・奉祀 ⑥陳列佛像，神主，牌位等以備祭祀 ⑨佛家語（1）礼佛儀式（2）施捨給僧尼的銭財或飲食（⑤祭事。奉祀する。 ⑥祭祀に備えるために，仏像・神主【＊故人を記録した霊碑】・位牌を陳列すること。 ⑨仏語（1）仏陀を礼拝する儀式（2）僧侶や尼僧に与えられるお金や食べ物）	
4	○	㈣やしなふ。		①侍奉：伺候。（世話をする。奉仕する。）	
5	×	㈤大いに。大きい。			
6	×	㈥うやうやしい。			
7	×	㈦或は共に作る。			
8	○	㈧申立。訊問せられて事情を述べたもの。	(3) 問に答える。白状する。述べる。／供述／口供，自供	⑧受審者陳述，交代案情（事件の説明をするため，裁判を受ける人の陳述書。）	

9	×	㈼姓。			
10	×	邦（イ）とも。従者。			
11	×	邦（ロ）ども。複数を表はす接尾語。			
12	×			②設置：安放（設置する。配置する。）	
13	×			③執役，任職（服役する。就任する。）	

『日国』の字音語素の意味番号（1）から（3）のいずれも『大漢和辞典』と『漢語大詞典』に対応する意味記述が見られた。『大漢和辞典』における「㈠まうける。供給する。そなえる。又其のもの。」と「㈢まつる。」をそれぞれ『日国』の意味番号（1）と（2）に分類した。意味記述を踏まえると，意味番号（1）は「神仏にそなえる。もてなす」という意味であるため，『大漢和辞典』における「㈠まうける。供給する。そなえる。又其のもの。」の方がより相応しくも思えるが，神仏に対する用法と限定され対象に対する謙譲の意が感じられ，一方で㈠では対象に対する言及がないことから，ここでは暫定的に「㈢まつる」と対応させている。さらにこの「㈢まつる」には，『漢語大詞典』における「⑤祭祀・奉祀（祭事・奉祀する）」「⑥陳列佛像，神主，牌位等以備祭祖（祖先崇拝のための仏像，神像，位牌の展示）」「⑨佛家語（1）礼佛儀式（2）施合給僧尼的銭財或飲食（仏語（1）仏陀を礼拝する儀式（2）祭祀に備えるために、仏像・神主・位牌を陳列すること）」が，神仏を対象とする点で対応すると考えられる。

また，『大漢和辞典』の意味番号㈠や，『漢語大詞典』の「④奉献，進献（与えること。）」において対象を限定する明確な記述はない。さらに『漢語大詞典』の「⑦祭品，供物（お布施，提供物）」では，僧侶に渡すお布施と対象の明記されていない提供物とが同じ意味番号で括られている。『日国』に限らず，『大漢和辞典』と『漢語大詞典』においても，与えたり供えたりする対象に区別なく一つの意味番号にまとめられていることがうかがえる。

『日国』の「(3) 問に答える。白状する。述べる。」については，意味番号（1）や（2）とはかなり異なる意味だが,『大漢和辞典』と『漢語大詞典』にも対応する意味番号があることから，近代に西洋から流入した意味というよりも, 中国における「供」の意味用法が日本でも用いられるようになったと考えられるだろう。

その他,『大漢和辞典』における「㈤大いに。大きい。」「㈥うやうやしい。」「㈦或は共に作る。」「㈨姓。」は『漢語大詞典』や『日国』には見られない。また,「邦（イ）とも。従者」や「（ロ）ども。複数を表はす接尾語。」は日本固有の意味ではあるが,『日国』には示されていなかった。一方で,『漢語大詞典』における「②設置：安放（設定する・配置する）」「③執役，任職（服役する。就任する。）」という意味は,『大漢和辞典』や『日国』には見られず，中国における用例かつ日本には伝わらなかったものと考えられる。

5 「供」の経済用語「供給（キョウ - キュウ）」の登場（1874 年）と定着

5 － 1「供給」の研究史

漢語熟語「供給」の語史については次の論文と辞典を参考にした。

- 進藤咲子（1981）「小幡篤次郎の英氏経済論の訳語」『明治時代語の研究 : 語彙と文章』明治書院，82-84
- 惣郷正明･飛田良文（1986）「供給」『明治のことば辞典』東京堂出版，110-111
- 佐藤亨（2007）「供給」『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』明治書院，182
- 白井清子（2022）「今昔物語集と孝子伝における漢語「供給」と「供養」（その一）」『（学習院大学）上代文学研究』第 47 号，1-24

進藤咲子（1981）「小幡篤次郎の英氏経済論の訳語」（『明治時代語の研究：語彙と文章』）によれば，日本においては古くから「クキフ」「グキフ」と呉音で読んでおり，それは『続日本紀』や『貴嶺問答』などに用例が見られる。『色葉字類抄』や『易林本節用集』などの古辞書や，近世では『御伽草子』などにも用例があり，古くから用いられていた語であることが明らかになっている。進藤氏は，「英氏経済論」を翻訳した小幡氏は英語「supply」の翻訳語として「供給」を採用したが，それは日本における「クキフ」の系統から選んだのではなく，『英華字典』にも「供給（キョウキュウ）」が見られるように近世中国訳語から採用したとしている。

また，佐藤喜代治氏が「学問の世界では漢音で読む習慣が生じ，それが伝統となった」と述べたことを踏まえ，小幡氏のような漢学者たちは漢音読みをしたと考えられている。佐藤亨氏の『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』にも同様の記述があり，「キョウキュウ」は呉音読みから漢音読みへの変化によるものであるという。

惣郷正明氏・飛田良文（1986）『明治のことば辞典』によれば，英語「Supply」の翻訳語として一般化した「供給」は，経済学の需要と対になって定着した語であるとし，中国の五経の一つである『礼記』曲礼上に典拠があることも明らかにされている（「祷祠祭祀，供給鬼神，非礼不誠不荘」）。また『大辞林（第四版）』には，「供給」が定着したのは，1881 年の『哲学字彙』に英語「Supply」の翻訳語として載ったことがきっかけであるという記述があった。

また，白井清子氏は，『今昔物語集』の孝養譚と『孝子伝』で用いられている「供給（グキュウ）」と「供養」を調査する中で，『日国』と『「鎌倉遺伝」にみる中世のことば辞典』における「供給」の記述に触れている。その上で図書寮本『類聚名義抄』に「供給　タテマツリモノ」とあり，「下から上へのたてまつりもの」，「尊敬すべき人としての父母や師にたてまつる，差し上げる」という意が「供給」にはあったとしている。

5－2 「供」の文字史――1870年を境に登場した「供」のふたつの意味

語基「供」は奈良時代から「神仏に対してそなえる。もてなす」もしくは「神仏に対してさし出す」という意で用いられ，対象は神仏に限定されていた。前者は『日国』字音語素の意味番号（1）に該当し，後者は意味番号（2）に列挙される熟語のうち神仏に対するものに該当すると考えられる。

後者については2でも触れた通り，意味番号（2）に挙げられた熟語には神仏に関係するものとそうでないものがあり，それらの『日国』における初出用例の年代にも隔たりがあるのだ。『日国』の見出し「供給（グ―キュウ）」には，730年『続日本紀』に「詔曰，供給斎宮年料」という斎宮に対してそなえる意の用例が，また見出し「供進」には『紀家集』（891～911頃）の「一刻許，供進御膳，侍臣等遍賜食」という天子に献上する意の用例が初出例として挙げられている。

1870年以降，「対象の身分に制約なく，役立てる。さし出す。」と『日国』字音語素の意味番号（3）「問いに答える。白状する。述べる。」という2つの意味の熟語が急増する。

5－3 「供給」の読み方（グ／キョウ）と意味・用法の変化（「非神仏対象」へ）

古くは，そなえたりさし出したりする対象が神仏に限定されていた「供」だが，現在では「供給（キョウキュウ）」「提供」など対象を限定せずに与えるという意で用いられることが多い。その用法が初めて用いられた熟語は「供給（キョウキュウ）」とみられる。次にあげるのは『日国』における「供給（キョウキュウ）」の記述である。

○きょう - きゅう［‥キフ］【供給】

（1）物を与えること。提供すること。ぐきゅう。古くは，多く「ぐきゅう」と読んだ。→ぐきゅう（供給）。

＊小学読本〔1874〕〈榊原・那珂・稲垣〉四「昼は我が食の半を遺り，

夜は我が臥床に寝させて供給しおきたれども」

＊将来之日本〔1886〕〈徳富蘇峰〉一二「実に当時の農工商は皆是れ此の武士と高等なる武士に供給奉仕せんか為に生存する所の輜重部にてありしなり」

＊雁〔1911 ～ 13〕〈森鴎外〉一二「末造は妄りに語って，相手に材料を供給（キョウキフ）するやうな男ではない」

＊礼記 - 曲礼上「祷祠祭祀，供給鬼神，非礼不誠不荘」

(2) 市場の需要に応じて，財・サービスを価格の支払いと交換に引き渡すこと。また，その出す分量。需要。

＊米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉一・一三「運搬して市場に価を得て，需用（ママ）の人に供給を遂くるを以て，其終功とす」

＊哲学字彙〔1881〕「Supply 供給（財）」

＊改正増補和英語林集成〔1886〕「ジュヨウ kyokyu（キョウキュウ）」

＊社会百面相〔1902〕〈内田魯庵〉増税「一時砂糖の供給を絶ったので砂糖の直段（ねだん）が俄に騰貴したのが大原因です」

『日国』において「供給」には２つの意味があり，(1) は「古くは，多く「ぐきゅう」と読んだ。」という記述があるが，これまで「供給（グキュウ）」の用例で確認してきたように，「供給（グキュウ）」には神仏（ないし天子・斎宮相当）に対して用いられてきている

その一方で (2) は「需要」の対になる経済用語として用いられるものである。「供給」の研究史を踏まえると，「供給」は「グキュウ・クキュウ」という呉音読みで古くから用いられてきていたが，小幡篤次郎が『英氏経済論』を翻訳する際に英語「supply」を「供給」と翻訳した。一方その頃，漢音で読む傾向が生じていた。そのことを裏付けるように，『英華字典』にも「供給（キョウキュウ）」が見られたこともあり，近世中国訳語から採用されたと考えられる。

『日国』における「供給」の初出例は意味番号（1）では 1874 年，（2）では 1877 年であるが，『英氏経済論』の成立は 1872 年であるので，小幡氏が翻訳した段階でこれの読みが「キョウキュウ」であるならば，1872 年が「供給（キョウキュウ）」の初出例ということになるだろう。「供給」の意味番号（2）は，現代語でのいわゆる「需要と供給」におけるような supply の訳語に相当する意味であるが，この意味は，『英紙経済論』で「Supply」の翻訳語として「供給」があてられ，久米邦武氏の『米欧回覧実記』（1877 年）や，1881 年の『哲学字彙』においてそれが用いられたことにより定着した，いわば翻訳語的意味としての新たな用法であると解釈される。

一方で，意味番号（1）については，古くから存在する「供給（グキュウ）」が，経済用語として翻訳に採用され新たな用法を得た際に漢音読みが主流となり，それに伴って古くから持っていた神仏を対象とする意味が徐々に小さくなったことで，「供給（キョウキュウ）」の意味が神仏限定ではなくなったと考えられるのではないだろうか。

5－4 「供給」の対象の変遷

次の 3 章の**【表 4】**は，種々の資料――『日国』・CHJ 中納言日本語歴史コーパス・朝日新聞クロスサーチ・読売新聞データベースヨミダス歴史館――により「供給」の 1870 年代までの用例を集めたものである（表記は全て「供給」で，新聞記事の用例はいずれも見出しでの例である）。

【表 4】「供給」の用例一覧（1870 年代まで）

番号	読み	年代	作品名	用例	備考
1	グキュウ	730	続日本紀	詔曰，**供給**斎宮年料	△斎宮に対する供給
2	グキュウ	1100	今昔物語集【CHJ】	自然ら我来て**供給**する也」と。法空此れを聞くに，貴き事限なし。此のごとく常に**供給**する間に，法空飲食に乏しき事無し。	△法空（法隆寺の僧侶）に対する供養給仕の意

3	グキュウ	1100	今昔物語集【CHJ】	此の羅刹女常に来て持者に**供給**するを良賢見て，聖人に問て云く，「此の所，遥に人の気を離れたり。何ぞ此のごとく端正美麗なる女人常に来て**供給**する。	△法空（法隆寺の僧侶）に対する供養給仕の意
4	グキュウ	1100	今昔物語集【CHJ】	道心を発しける始め，彼の日蔵に随て**供給** して，彼の人の心に違ず。而るに，理満聖人思はく，	△日蔵上人（僧侶）に対する供養給士の意
5	クギュウ	1120 頃か	今昔物語集【日国】	然れば，孟宗，年来の間，朝暮の備へに笋（たかむな）を構へ求めて**供給**（くぎふ）して闕く事无（な）し	□孟宗の老母に対する供給の意
6	クキュウ	1177 ～1181	色葉字類抄【日国】	**供給** クキウ	
7	グキュウ	1185 ～1190	貴嶺問答【日国】	明法先生明秀。貴命賜方間之宿所。致朝暮之**供給**。仍率妻子寄宿ス。有嫡女生年十四歳云云。密々通或青侍。父ノ生セイ称未及結婚ノ齢。	△明法道の先生に対する供給か
8	グキュウ	1502	実隆公記【日国】	日吉祭蔵人弁可参向之由有支度之処，依**供給**違乱延引云々	△大山咋神，大国主神に対するものか（＊）
9	クキュウ	1597	易林本節用集【日国】	**供給** クキフ	
10	グキュウ	〔室町末〕	御伽草子【日国】	「貧乏思**供給**（グキウ）」	□敦巨の老母に対する供給の意
11	キョウキュウ	1874	小学読本【日国】	昼は我が食の半を遺り，夜は我が臥床に寝させて**供給**しおきたれども	■
12	そなえ	1875	読売新聞【CHJ】	依りては各驛に於ける同社の出張所分社及傳送所等へ申入人馬の**供給**可爲取扱此旨相達候事（但し繼立申入候節は相對穩當を旨とし	供給に「そなへ」の読み仮名あり
13	キョウキュウ	1876	読売新聞【ヨミダス歴史館】	耕田や荷役に尽くし，牛乳や肉牛を**供給**する牛を一等の仁獣とたたえる	
14	キョウキュウ	1877	読売新聞【ヨミダス歴史館】	「輓水会社」設立が申請される　東京府下に良質の水を**供給**する目的	○
15	キョウキュウ	1877	米欧回覧実記【日国】	運搬して市場に価を得て，需用の人に**供給**を遂くるを以て，其終功とす	●経済用語として需要の対となる供給
16	キョウキュウ	1878	読売新聞【歴史館】	滋賀県・琵琶湖へサケ養殖で卵５万粒を**供給**	○

17	まかない	1878	国立国会図書館蔵文明田舎問答初編【CHJ】	卑屈根性も程がある，時としてはかう張込んで，おや吾ゝが**供給**して，軍番に頼んで置けば，ろくろくに出来ねへ癖に，威張まはるも	供給に「まかない」の読み仮名あり
18	キョウキュウ	1879	朝日新聞【朝日新聞クロスサーチ】	幸町二丁目広岡別荘……（広岡別荘の良水を通行人にも**供給**）	■通行人に対する供給
19	キョウキュウ	1879	読売新聞【ヨミダス歴史館】	養蚕用の蚕卵紙，横浜の業者が価格安定はかり，一手仕入れで**供給**	●

【表４】においては，記号毎に「供給」の対象と意味を分類している。
△：神仏を対象とする
□：老母を対象とし，「養う」に通じる
■：神仏以外の人を対象とする
○：神仏や人以外の場所などを対象とする
●：需要の対をなす経済用語

＊宮城県日吉神社には大山咋神と大国主神が祀られている。後柏原天皇の文亀２年（1502, 室町）二木村に住む勘右衛門なる者が伊勢参宮の際，近江国滋賀郡坂本（現滋賀県大津市坂本本町）に鎮座する日吉大社に詣で，大山咋神，大国主神，二神の分霊を請い願い，現在の地に勧請したという伝説がある（宮城県神社庁 HP より）。例年春季例祭が４月 15 日前後に行われている点からも日吉神社の例祭と考えられるのではないか。

【表４】の１から４までの『続日本紀』や『今昔物語集』における用例は，斎宮や僧侶に対して「供給」が用いられ，「神仏に対して」という意が確認される。２から４の『今昔物語集』の用例については，『新編日本古典文学全集』の註釈においては，いずれも供養給仕の意であると補足されている。また，７『貴嶺問答』や８『実隆公記』の供給の対象は不確かだが，それぞれ明法道や例祭にまつわるものである可能性が高い。しかし，『日国』に示された５は『今昔物語集』の用例であるが，ここでは孟宗が老母に対して，さらに，10 室町時代末期の『御伽草子』の用例も敦巨の老母に対して養うという意で用いられているため，これらに神仏に関係する意味合いは認められないだろう。そのため，『日国』の見出し「供給（グキュウ）」において示された用例は，対象が神仏であるものとそうでないものにさらに区分することができる。「供給（グキュウ）」は，奈良から室町時代にお

いて，神仏に対してそなえたりさし出したりする用例が主である一方で，白井氏による先行研究にもあったように「養う」という意味でも用いられていたことが推察される。

11 の『小学読本』（1874 年）の用例に「昼は我が食の半を遺り，夜は我が臥床に寝させて」とあるように，『御伽草子』から『小学読本』までは時代的な隔たりがあるものの，「養う」という意に通じるものがあると考えられる。また，14 では東京府下に対して，16 では琵琶湖に対して供給するという用法であり，「供給」が神仏や人以外に対しても用いられるようになったことがうかがえる。古く「（老母を）養う」の意でも用いられた「供給（グキュウ）」が，漢音読みの「供給（キョウキュウ）」として，「必要としているところにまわし与える」というより広い意味で用いられるようになったと考えられる。こうして「供給」をはじめ「提供」「供用」「供出」など，神仏に対する用法ではなく，「必要としているところにさし出す（役立てる）」という意味を持つ熟語が続々と登場する。これは「供」の意味が異なるものに変化したというよりも拡大したと捉えるべきではないだろうか。

また，1870 年以降，それまで主だった神仏に対する用例があまり見られないのは，古くは神や仏が日常生活に密接に関わっていたものの，時代を経て貴族文化も衰退し，明治時代以降は近代化も進んだことで以前よりその影響力が弱まったことや，1868 年の神仏分離令を皮切りに起こった廃仏毀釈により，「僧侶にさし出す」などの仏教的な用法が用いられる機会が失われたことも影響しているかもしれない。

経済用語としての「供給」については，1872 年に「英氏経済論」が翻訳されて以降，15 や 19 のように「Supply」の意で用いられる例も散見されるものの，1870 年代にはその用例はあまり多くない。CHJ 日本語歴史コーパスで「供給」の用例を確認すると，1887 年の『国民之友』「支那を改革する難きに非らず」に「需用此處に迫れば，供給彼處に應じ，乍ち

四百餘州を擧げて一大市場となし,」という用例があり，また同年同雑誌の「一國要するの貨幣幾何ぞ」においても,「貨幣」や「需要」などの語と共に経済用語として用いられた例が 8 例確認される。『日国』における「供給（キョウキュウ）」の意味番号 (2) すなわち「Supply」の翻訳語である「供給」の用例は，1880 年代以降に急増し定着していったと推察される。

また,「供給」に「そなへ」や「まかなひ」という訓読の読み仮名が振られている用例（12 や 17）については , ここでは確認のみに留めておく。

6　語基「供」の「述べる」の意の発生――「口供」から「自供」「供述」へ

語基「供」は,『日国』の字音語素では，意味番号（3）としてさらに新しい意味が加わっている。すなわち「問いに答える。白状する。述べる。」である。この（3）の意味の用例で一番古いのは 1874 年の「口供」であった。「口供」はこんにちの日常語では耳にしないが,『日国』には次のように記載されている（用例は各意味での 1 列目のみを記載し他は略した)。

○こう - きょう【口供】

(1) 事実を口頭で述べること。ことばで意見を述べること。

＊当世書生気質〔1885 ～ 86〕〈坪内逍遙〉五「口供（コウキャウ）をフヒニッシュ〔完結（をはる)〕したまへ」

(2) 罪人が口頭で罪状を申し述べること。また，それを筆記したもの。くちがき。

＊明六雑誌 - 一〇号〔1874〕栲問論・二〈津田真道〉「罪人の口供に拘々たらざるなり」

＊未信篇「有人来首反叛，先将首人，密禁看其呈状是反是判，審其口供，是反是叛

(3) 裁判所などの尋問に応じて，被告人，証人，鑑定人などが口頭で行

なう供述。【用例なし】

「口供」は，いわば「口頭」で事実などを「(提) 供する」という意味合いでの熟語とみられる。

まず，2－3で確認したように，「供」は『大漢和辞典』に「㈧申立。訊問せられて事情を述べたもの。」とあり，『漢語大詞典』にも「⑧審者陳述，交代案情【拙訳＝事件の説明をするため，裁判を受ける人の陳述書。】」とある。字音語素の意味番号 (3)「問いに答える。白状する。述べる。」は，中国の「供」の用法に基づいて日本でも用いられるようになったと考えられる。

「口供」については，『日国』において 1874 年の『明六雑誌』「拷問論」の中に「罪人の口供に拘々たらざるなり」とあり，上記の「口供」の意味番号 (2) に該当する用法が示されている。また (2) には，『未信篇』の「有人来首反叛，先将首人，密禁看其呈状是反是判，審其口供，是反是叛」【拙訳＝「もし誰か反・叛の罪を起こして自首しに来た場合は，まず監禁し，その自首状を読んで叛罪か否かを判断し，またその「口供」が，反罪か叛罪かどうかを審査される。】という中国の用例があり，近代に入って日本でもこの意味用法が用いられるようになったと考えられる。CHJ 日本語歴史コーパスで「口供」の用例を収集すると，この「拷問論」にはこの他に 4 例用例が確認され，いずれも意味番号 (2) に該当するものである。全 5 例のうち，4 例が「罪人の口供」という用法であった。その他新聞データベースなどを利用して用例を収集してもこれ以前のものは見つからなかったため，「拷問論」が現時点では初出例ということになる。

翌年 1875 年の『軍制綱領』において「口供甘結の上は裁判官参座の将校と之を判決す」という用例が見られるなど，1870 年代から，徐々に「罪人が述べる」という意味で用いられるようになったことがうかがえる。朝日新聞においても，1879 年以降，犯罪や裁判にまつわる記事の中で「口供」

の用例が増加していることが認められる（朝日新聞クロスサーチを利用）。

意味番号（3）については『日国』には用例が示されていなかったものの，新聞データベースから得られた用例を踏まえると「口供書」という三字熟語で用いられることが多いようだった。

また，「かの復讐にて其名も……（仇討ちの臼井六郎，口供書を再読）」という裁判に関する用例が，1881 年 3 月 23 日の朝日新聞朝刊に見られる。

さらに，毎日新聞データベース毎索により「口供」の用例を収集すると，1945 年の用例ではあるものの，「戦争犯罪・横浜公判，土屋達雄被告に死刑求刑　米人弁護人，口供書のみでは不十分と主張」など裁判に関する記事の中で「口供書」という語が多く用いられていた。そこで『日国』で「口供書」の見出しを確認すると，その意味は「裁判所などの尋問に応じて行なう被告人，被疑者，証人などの供述を筆記した書面。供述書。口供状。」である。また初出例として『逃亡犯罪人引渡条例（明治二〇年）』（1887 年）「逮捕状を発するの根拠と為りたる口供書」が示されていた。意味番号（3）の用法も（2）と殆ど同時期より用いられるようになったと考えられるだろう。

このように，近代化に伴って「拷問論」や『軍制綱領』，条例，裁判に関する新聞記事に多く見られるようになった語であることから，司法に関係する用語，また法律用語として用いられたとも考えられるのではないか。

また，「口供」の意味番号（1）については，『日国』における初例は坪内逍遙の『当世書生気質』（1885 ～ 86）である（「口供（コウキャウ）をフヒニッシュ〔完結（をはる）〕したまへ」）。この作品では当時の学生の生活・気質が描写されているため，当時の学生の間では「口頭で意見を述べる【供する】こと」の意で「口供」が用いられるようになったのかもしれない。

また，同時期（1885 年に）『伊藤特派全権大使復命書附属書類』における「閣下には先づ其遭難人民の口供を閲了し，然る後」という用例が続けて見られることから，（1）に該当する意味用法は 1880 年代に広まった可

能性が高い。1880 年代に，罪人や裁判に限定されない「口供」の意（意味番号（1）に該当する用例）が確認されたが, その後 1890 年には「供述」の初例が見られるように,「供」の「問いに答える。白状する。述べる。」という用法が徐々に見られるようになる。

7　語基「供」の熟語全リスト

最後に今後の追加調査のため,『日国』やネットの熟語検索サイト「漢字書き順・筆順 (書き方) 調べ無料辞典」及び「漢字熟語検索」で収集した「供」の熟語一覧を 2 文字熟語，3 文字熟語毎に列挙しておく。

また, 今回はこれらすべてを対象として調査してはいない。3 章の**【表 2】**の年表に含めていない熟語も少なくない。それらを含めて調査すれば，より詳密な変遷を解明することができるであろうが，語基「供」の歴史的変遷としては, 今回の考察でその概略を把握できたのではないか, と思われる。取り上げられなかった熟語それぞれに語史については，本稿を参考にしながらその詳細を解明していくことが必要であり, それは今後の課題でもある。

2 文字熟語一覧

供血　供給　供応　供具　供試　供出　供述　供水　供米　供花　供養
供物　供犠　供御　供華　供講
提供　子供　口供　供饌　御供　先供　節供　需供　神供　供侍　供人
星供　盆供　役供　益供　霊供
試供　供託　供与　供用　供覧　影供　応供　供血　供祭　供進　供笥
供先　供僧　供奴　供頭　供仏
供奉　供料　供賄　散供　自供　聖供　僧供　大供　内供　八供　仏供
密供　役供　供宴　供億　供饋
供儀　供源　供資　供需　供状　供餞　供膳　供帳　供麦　供付　供田

供詠　供過　供器　公供　供家
供香　供所　供神　供雑　供達　供奠　供灯　供餅　供蚊　定供　供衆

3 文字熟語一覧
女子供　御供物　鍵供託　鐘供養　観音供　供託金　供述書　菊供養　経供養　供託所　供用林　供花会
供養塔　供養法　子供心　子供会　荒神供　子供顔　子供組　子供衆　試供品　供部屋　供給源　橋供養
花供養　針供養　御影供　冥道供　虫供養　嫁節供　御仏供　牛供養　供え物　供え餅　供花会　供御院
供御所　供御人　供御方　供託法　供奉僧　供賄罪　光明供　子供屋　子供気　子供宿　人丸供　聖天供
大日供　内供奉　盆供養　五節供　御供衆　御供米　練供養　供備菜　供給者　供出米　供進使　供託書
供託物　供華会　供花衆　供御料　供祭所　供奉艦　供奉車　供奉神　供奉人　供米桶　供米所　供米田
供米袋　供物台　供物棚　供養会　供養具　供養心　供養塚　供養仏　供養米　供養物　供養文　供養料
供料所　供料持　赤供御　御酒供

8　今後の課題

まず, 先行研究である白井清子氏の「漢語「供給」「供養」ー今昔物語集」及び文献内で触れられていた『「鎌倉遺文」にみる中世のことば辞典』の記述を改めて確認し, 古くからの用例や「供給（グキュウ)」における「養う」の意味や「供養」の意味用法についても考察を深めなければならない。

また，第 3 章 3 ー 3 節の表 4 において，「供給（グキュウ)」の用例が神

仏用法か否かの判断が不確かなものがいくつかあるため，文献を参照しながらより正確に用例を分析する必要がある。また，それに関連して，「供給（グキュウ）」の中でも神仏用法であるものとそうでないものがあるとすれば，「供給」の（グキュウ）と（キョウキュウ）の読みの違いによる意味の区別をどうすべきか検討を続ける必要がある。

さらに, 3－4節で述べた「口供」をはじめとする「問いに答える。白状する。述べる。」という意味の出現について，司法や裁判で用いられる法律用語として定着したとしたが, 1874年以降日本で「口供」が用いられるようになった具体的かつ正確な要因についてさらに調査する必要がある。

9　語基「直」の熟語の初出年順年表

この章の語基「供」の**【表2】**の年表は，熟語数も少ない年表であるが，7節の熟語全リストを組み込んで，今後検討していく必要がある。本章担当者の佐藤は前稿の安部･漢語演習学生（2022）（本論文最末尾の【参考文献】参照）にて，語基「直」についての調査を行っている。ここでは，より複雑な語基年表の事例として，また，前稿を補う意味で，**【表5】**として「語基「直」の熟語の初出順年表」を紹介しておくことにする。

10　参考文献一覧

進藤咲子（1981）「小幡篤次郎の英氏経済論の訳語」『明治時代語の研究：語彙と文章』明治書院, , 82-84.

惣郷正明・飛田良文（1986）「供給」『明治のことば辞典』東京堂出版 110-111.

佐藤亨（2007）「供給」『現代に生きる幕末･明治初期漢語辞典』明治書院, 182.

【表 5】語基「直」の熟語の初出年順年表（『日本国語大辞典』による）

	概念分類	意味分類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
	Ⅰ	Ⅰ　任務や担当	Ⅰ	Ⅰ		Ⅰ									
	Ⅱ	Ⅱ　心理的用法			Ⅱ		Ⅱ			Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
	Ⅲ	Ⅲ　時間的距離的な近さ						Ⅲ	Ⅲ						
	Ⅳ	Ⅳ　物理的用法													
	Ⅴ	Ⅴ　物理的用法													
	『日国』字音語素意味	1まっすぐ。2すなお。3すぐに。4とのい。5ねだん。	4	4	2	4	2	3	3	2	2	2	2	2	2
	熟語		宿直	当直	直諫	直日	直道	直入	直下	曲直	直臣	愚直	直言	剛直	実直
時代	中国文献		南斉書		史記		論語		1松前城下作詩2望廬山瀑布詩	1礼記2春秋左伝／史記	漢書	栄史-李綱伝	春秋左伝	漢書	
奈良	771		□												
平安	833			□											
	900				□										
	997					□									
	1060						□								
	1177							○							
鎌倉	1220								3○						
	1235								4○						
南北朝	1346									2□					
	14C前								1○						
室町	1407										1○				
	1420											○			
	1485												1○		
	1529													○	
安土桃山	1593									2○					
	1603									1○					
江戸	1603														○
	1625														
	1716		○												
	1732				○										
	1770														
	1774														
	1782														
	1783														
	1798														
	1826														
	1827														
	1827														
	1832														
	1837														
	1847														
	1864														
明治	1868			○											
	1868														
	1870														
	1871														
	1872														
	1873														
	1874														
	1874														
	1874														
	1875														
	1876														
	1876														
	1877						○(1)								
	1877														

	概念分類	意味分類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
	Ⅰ	Ⅰ　任務や担当	Ⅰ	Ⅰ		Ⅰ									
	Ⅱ	Ⅱ　心理的用法			Ⅱ		Ⅱ			Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
	Ⅲ	Ⅲ　時間的距離的な近さ						Ⅲ	Ⅲ						
	Ⅳ	Ⅳ　物理的用法													
	Ⅴ	Ⅴ　物理的用法													
	『日国』字音語素意味	1まっすぐ。2すなお。3すぐに。4とのい。5ねだん。	4	4	2	4	2	3	3	2	2	2	2	2	2
	熟語		宿直	当直	直諫	直日	直道	直入	直下	曲直	直臣	愚直	直言	剛直	実直
明治	1884														
	1884														
	1886														
	1887														
	1888														
	1888														
	1889														
	1889														
	1889														
	1890														
	1890														
	1892														
	1898														
	1898														
	1898														
	1900														
	1900														
	1902														
	1904														
	1905														
	1907														
	1915														
	1922														
	1924														
	1924														
	1926														
昭和	1927														
	1928														
	1930														
	1934														
	1943														
	1946														
	1947														
	1947														
	1950														
	1956								○2						
	1960														
	1964														
	1965														
	1967														
	1968														
	1969														

概念分類	意味分類	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
Ⅰ	Ⅰ　任務や担当													Ⅰ		
Ⅱ	Ⅱ　心理的用法	Ⅱ							Ⅱ			Ⅱ				
Ⅲ	Ⅲ　時間的距離的な近さ		Ⅲ		Ⅲ	Ⅲ				Ⅲ			Ⅲ		Ⅲ	Ⅲ
Ⅳ	Ⅳ　物理的用法			Ⅳ			Ⅳ	Ⅳ			Ⅳ					
Ⅴ	Ⅴ　物理的用法															
『日国』字音語素意味	1 まっすぐ。2 すなお。3 すぐに。4 とのい。5 ねだん。	2	3	1	3	3	1	1	2	3	1	2	3	4	3	3
熟語		直心	直訳	直賜	直叙	直読	直線	直径	率直	直前	直立	直行	直射	直夜	直上	直隷
中国文献		後漢書								3 漢書	栄辱	法法			3 孔稚珪 - 北山移文	明史 - 地理志・序
771																
833																
900																
997																
1060																
1177																
1220																
1235																
1346																
14C 前																
1407																
1420																
1485																
1529																
1593																
1603																
1603																
1625		○														
1716																
1732																
1770			1 ○													
1774				1 □												
1782					○											
1783						○										
1798							1 ○									
1826								1 ○								
1827									□							
1827										3 ○						
1832											1 ○					
1837								○ 2								
1847												1 ○				
1864													1 □			
1868																
1868														○		
1870															2 ○	
1871																○
1872				1 ○												
1873																
1874													3 ○			
1874																
1874																
1875																
1876													2 ○			
1876																
1877																
1877													1 ○			
1877																

概念分類	意味分類	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
Ⅰ	Ⅰ　任務や担当													Ⅰ		
Ⅱ	Ⅱ　心理的用法	Ⅱ							Ⅱ			Ⅱ				
Ⅲ	Ⅲ　時間的距離的な近さ		Ⅲ		Ⅲ	Ⅲ				Ⅲ			Ⅲ		Ⅲ	Ⅲ
Ⅳ	Ⅳ　物理的用法			Ⅳ			Ⅳ	Ⅳ			Ⅳ					
Ⅴ	Ⅴ　物理的用法															
『日国』字音語素意味	1まっすぐ。2すなお。3すぐに。4とのい。5ねだん。	2	3	1	3	3	1	1	2	3	1	2	3	4	3	3
熟語		直心	直訳	直賜	直叙	直読	直線	直径	率直	直前	直立	直行	直射	直夜	直上	直隷
1884																
1884																
1886																
1887											2○					
1888																
1888			2○													
1889											3○					
1889																
1889																
1890																
1890																
1892												2○				
1898									○							
1898																
1898																
1900																
1900																
1902																
1904																
1905																
1907																
1915										1○						
1922																
1924																
1924																
1926																
1927																
1928																
1930																
1934																
1943															1○	
1946										2○						
1947																
1947																
1950																
1956																
1960																
1964																
1965																
1967																
1968																
1969																

概念分類	意味分類	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
Ⅰ	Ⅰ　任務や担当															
Ⅱ	Ⅱ　心理的用法		Ⅱ													
Ⅲ	Ⅲ　時間的距離的な近さ			Ⅲ	Ⅲ		Ⅲ			Ⅲ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ		Ⅲ
Ⅳ	Ⅳ　物理的用法	Ⅳ				Ⅳ		Ⅳ	Ⅳ		Ⅳ				Ⅳ	
Ⅴ	Ⅴ　物理的用法															
『日国』字音語素意味	1 まっすぐ。2 すなお。3 すぐに。4 とのい。5 ねだん。	1	2	3	3	1	3	1	1	3	1	3	3	3	1	3
熟語		直角	直情	直覚	直接	直截	直精	直進	直根	直航	垂直	直写	直視	直輸入	直往	直輸
中国文献			後漢書-孔融伝論				清国行政法汎論-工部	1 法法 2 天台山賦					1 晉書-阮籍伝			
771																
833																
900																
997																
1060																
1177																
1220																
1235																
1346																
14C 前																
1407																
1420																
1485																
1529																
1593																
1603																
1603																
1625																
1716																
1732																
1770																
1774																
1782																
1783																
1798																
1826																
1827																
1827																
1832																
1837																
1847																
1864																
1868																
1868																
1870																
1871																
1872																
1873		○														
1874																
1874			○													
1874				○												
1875					○											
1876																
1876						○										
1877																
1877																
1877							○									

概念分類	意味分類	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
Ⅰ	Ⅰ　任務や担当															
Ⅱ	Ⅱ　心理的用法		Ⅱ													
Ⅲ	Ⅲ　時間的距離的な近さ			Ⅲ	Ⅲ		Ⅲ			Ⅲ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ		Ⅲ
Ⅳ	Ⅳ　物理的用法	Ⅳ				Ⅳ		Ⅳ	Ⅳ		Ⅳ				Ⅳ	
Ⅴ	Ⅴ　物理的用法															
『日国』字音語素意味	1まっすぐ。2すなお。3すぐに。4とのい。5ねだん。	1	2	3	3	1	3	1	1	3	1	3	3	3	1	3
熟語		直角	直情	直覚	直接	直截	直精	直進	直根	直航	垂直	直写	直視	直輸入	直往	直輪
1884								1○								
1884									○							
1886										○						
1887																
1888											2○					
1888																
1889																
1889											3○					
1889												○				
1890																
1890													1○			
1892																
1898																
1898																
1898													2○			
1900														○		
1900															○	
1902																○
1904																
1905																
1907																
1915																
1922																
1924																
1924																
1926																
1927																
1928								2○								
1930																
1934																
1943																
1946																
1947																
1947																
1950																
1956																
1960																
1964																
1965																
1967																
1968																
1969																

概念分類	意味分類	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58
Ⅰ	Ⅰ　任務や担当				Ⅰ											
Ⅱ	Ⅱ　心理的用法															
Ⅲ	Ⅲ　時間的距離的な近さ	Ⅲ				Ⅲ	Ⅲ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ		
Ⅳ	Ⅳ　物理的用法			Ⅳ				Ⅳ							Ⅳ	Ⅳ
Ⅴ	Ⅴ　物理的用法		Ⅴ													
『日国』字音語素意味	1 まっすぐ。2 すなお。3 すぐに。4 とのい。5 ねだん。	3	5	1	4	3	3	1	3	3	3	3	3	3	1	1
熟語		直属	安直	直流	日直	直面	直後	直球	直営	直通	直結	直送	直売	直撃	直方体	直消降
中国文献																
771																
833																
900																
997																
1060																
1177																
1220																
1235																
1346																
14C 前																
1407																
1420																
1485																
1529																
1593																
1603																
1603																
1625																
1716																
1732																
1770																
1774																
1782																
1783																
1798																
1826																
1827																
1827																
1832																
1837																
1847																
1864																
1868																
1868																
1870																
1871																
1872																
1873																
1874																
1874																
1874																
1875																
1876																
1876																
1877																
1877																
1877																

概念分類	意味分類	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58
Ⅰ	Ⅰ　任務や担当				Ⅰ											
Ⅱ	Ⅱ　心理的用法															
Ⅲ	Ⅲ　時間的距離的な近さ	Ⅲ				Ⅲ	Ⅲ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ		
Ⅳ	Ⅳ　物理的用法			Ⅳ				Ⅳ							Ⅳ	Ⅳ
Ⅴ	Ⅴ　物理的用法		Ⅴ													
『日国』字音語素意味	1 まっすぐ。2 すなお。3 すぐに。4 とのい。5 ねだん。	3	5	1	4	3	3	1	3	3	3	3	3	3	1	1
熟語		直属	安直	直流	日直	直面	直後	直球	直営	直通	直結	直送	直売	直撃	直方体	直消降
1884																
1884																
1886																
1887																
1888																
1888																
1889																
1889																
1889																
1890																
1890																
1892																
1898																
1898																
1898																
1900																
1900																
1902																
1904		○														
1905			2 ○													
1907			1 ○													
1915																
1922				3 ○												
1924					2 ○											
1924						1 ○										
1926							1 ○									
1927								○								
1928																
1930									○							
1934										1 ○						
1943																
1946																
1947											○					
1947										2 ○						
1950												○				
1956																
1960							2 ○									
1964													○			
1965														2 ○		
1967														3 ○		
1968															○	
1969																○

白井清子（2022）『今昔物語集と孝子伝における漢語「供給」と「供養」（その一）』学習院大学上代文学研究第 47 号，1-24.

『漢語大詞典』（1986 ～ 1994）漢語大詞典出版社

白川静（1996）『字通』平凡社（ジャパンナレッジ Lib（gakushuin.ac.jp）より（2022 年 9 月 1 日最終閲覧）

諸橋轍次（1955）『大漢和辞典』大修館書店

『日本国語大辞典（第二版）』（2003）小学館（ジャパンナレッジ Lib（gakushuin.ac.jp）より（2022 年 11 月 8 日最終閲覧）

『大辞林（第四版）』（2019 年）三省堂

漢字熟語検索（かんじじゅくごさあち）（yoso.work）（2022 年 7 月 26 日最終閲覧）

漢字書き順・筆順調べ辞典：漢字読み方・書き順（書き方）など漢字解説サイト（quus.net）（2022 年 7 月 26 日最終閲覧）

毎日新聞社のデータベース「毎索」（gakushuin.ac.jp）（2022 年 11 月 7 日最終閲覧）

朝日新聞記事検索サービス（gakushuin.ac.jp）（2022 年 11 月 7 日最終閲覧）

ヨミダス歴史館（gakushuin.ac.jp））（2022 年 11 月 7 日最終閲覧）

CHJ 中納言（ninjal.ac.jp）（2022 年 11 月 7 日最終閲覧）

国立国会図書館デジタルコレクション（ndl.go.jp）（2022 年 10 月 20 日最終閲覧）

宮城県神社庁（miyagi-jinjacho.or.jp）（2022 年 11 月 4 日最終閲覧）

第４章　漢語語基「円」──具体的事物から抽象的図形概念へ──

安部清哉・北村優奈

1　はじめに

1－(1)　本論の目的

「円」という漢字を見たときに，何を連想するだろうか。恐らく，丸い図形の「円」を思い浮かべる人は少なくないだろう。あるいは，日本の通貨の単位「円」の印象や,「円滑」などにおける図形でも単位でもない「円」が真っ先に思い浮かんだ人もいるかもしれない。しかし，いま挙げた意味は比較的最近になって生まれた意味であり，古来は，いわゆる丸いものと言っても，平面的図形ではなく具体的事物としての丸い形状の物体を指して「円」は使われていた。具体的円形の事物からいわば意味が抽象化してきているのである。

本稿では漢字「円」および語基「円」としての意味変遷について，特にそのような抽象化の契機となったと考えられる（3 参照）熟語「円形」に焦点を当て，語基「円」の意味変化について考察してみることにしたい。

1－(2)　漢語語基「円」の意味・用法と熟語「円形」の史的位置

漢語語基「円」の意味を，例えば,『日本国語大辞典』の字音語素欄における意味記述で見てみると，次のように分類されている。

○【円＝圓】［ユン］

(1) まるい。／円円／方円／円転／円蓋，円球，円丘，**円形**，円座，円陣，円錐，円卓，円柱，円項，円筒，円盤，円墳／

(2) まるい図形。／楕円，長円，半円，同心円／円弧，円周，円心／

(3) おだやか。満ちている。欠けたところがない。／団円／円滑, 円熟,

円満，円頓，円融／円覚，円悟／

(4) 貨幣の単位。／新円，日本円／円価，円貨，円本／→えん（円）

ここで意味毎に事例として挙げられている熟語の『日国』での初出年の古さと意味の発達について，漢字「円」（名詞）の単独用法および漢字「円」の字源的意味も考慮して，語基「円」の意味の分類と順番を史的に再編成してみると，次のようになる（詳しくは別稿参照）。

Ⅰ《物体の形状》三次元的に把握される，厚みを伴ったまるい形状の具体的事物。 ←旧(1)

円座〔735〕，円蓋〔797 頃〕，**円形（具体的事物の形として）〔900 年頃〕**など

Ⅱ《仏語》さとり・功徳などが欠けることなく十分に満ち足りていること。 ←旧(3)の仏語

円満〔835 頃か〕，円覚〔984 ～ 985〕など

Ⅲ《形の概念》抽象的なまるさ。二次元的に把握される図形としてのまるさ。 **←旧(1)の「円形」**＋旧(2)

半円〔1722〕，**円形（抽象的概念として）〔『暦象新書』1798 ～ 1802〕**など

Ⅳ《人の性情・雰囲気の様子》欠けることがなく満ちていて，穏やかであるさま。 **←旧(3)の仏語以外の熟語**

円熟〔1725 頃〕，団円〔1807 ～ 11〕など

Ⅴ《単位》日本の貨幣単位 ←旧(4)

円貨〔1872〕，円本〔1928〕など

このⅢ，Ⅳ，Ⅴでの意味は，Ⅲの「半円」やⅣの「円熟」以降は，主に近世半ば以降の新しい段階で発生した意味と考えられる。中でもⅢの「半

円」やⅢ「円形」，また，Ⅳ「円熟」はこれらの新しい意味の誕生に関係する熟語かと考えられる。その中でも「円形」は，Ⅰの意味での使用もあり，かつ，Ⅲの用法では翻訳資料（『**暦象新書**』）**で**翻訳語として抽象的な「Ⅲ　《形の概念》抽象的なまるさ」を表すようにもなっていて特に注目される。そこで, 本稿では「円」の意味変遷を検討するために, 特にこの「円形」という熟語に焦点を当てて考察することにしたい。

2　『日国』『漢語大詞典』『大漢和辞典』における記述

まず,『日国』の字音語素に記載されている「円」の熟語例を出現年代順に並べ, 1 に掲載した新意味分類によって整理したのが, 以下の表である。「半円」「円形」の位置や，近世以降と考えられる意味Ⅲ，Ⅳ，Ⅴに属する熟語の歴史的位置を概観することができる。

【表 1】 語基「円」―『日国』字音語素欄の熟語の初出時期

意味番号	概念分類	意味	1	2	3	4	5	6
意味Ⅰ	《物体の形状》	《物体の形状》三次元的に把握される、厚みを伴ったまるい形状の具体的事物	Ⅰ	Ⅰ			Ⅰ	Ⅰ
意味Ⅱ	《仏語》	《仏語》さとり・功徳などが欠けることなく十分に満ち足りていること。				Ⅱ		
意味Ⅲ	《形の概念》	《形の概念》抽象的なまるさ。二次元的に把握される図形としてのまるさ。			Ⅲ			Ⅲ
意味Ⅳ	《人の性情・雰囲気の様子》	《人の性情・雰囲気の様子》欠けることがなく満ちていて、穏やかであるさま。						
意味Ⅴ	《単位》	《単位》日本の貨幣単位						
	『日国』字音語素の意味番号	(1)まるい。(2)まるい図形。(3)おだやか。満ちている。(4)貨幣。	1	1	1	3	1	1
	漢語熟語		円座	円蓋	方円	円満	円丘	円形
	中国文献		(3)■晉書 - 阮咸伝		■孟子 - 離婁・上	(1)■*隋煬帝 - 入朝遣使奏書 ■*仏地経論 - 一 (2)■*南史 - 梁武帝紀	(2)■*周礼 - 春官・大司楽	
奈良	735		□					
平安	797 頃			□(1)				
	835 頃				□			
	835 頃か					□(1)		
	856						□(2)	
	900 頃							□(1)
	984 ～ 985							
	995 ～ 1335					○(2)		
	1010 か							
	1060 頃							
	1120 頃か					○(1)		
	13C 前							
	1231 ～ 53							
	1275				○			○(1)
	1292 頃か		○(1)					
南北朝	南北朝							
室町	14C 後						○(3)	
	1423 頃							
	1463 ～ 64 頃							
	1477							
	1548 頃							
江戸	1712							
	1722							
	1725 頃							
	1779 ～ 1820 頃		○(3)					
	1798~1802							
	1807~11							
	1823							
	1832~36							
	1836							
	1855~58							
	1860							
明治	1870~71							
	1872							
	1874~76							
	1875							
	1877							
	1879~80							
	1883~84							
	1884			○(2)				○(2)
	1889							
	1890							
	1894							
	1895					○(3)		
	1902							
	1905 ～ 06					○(4)		
	1908							
明治・大正	1912							
大正	1916							
	1917							
	1920 ～ 21							
	1923							
昭和	1928							
	1931							
	1947							
	1956							

概念分類	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
《物体の形状》		Ⅰ			Ⅰ	Ⅰ		Ⅰ		
《仏語》	Ⅱ		Ⅱ	Ⅱ			Ⅱ			
《形の概念》									Ⅲ	
《人の性情・雰囲気の様子》										Ⅳ
《単位》										
『日国』字音語素の意味番号	3	1	3	3	1	1	3	1	2	3
漢語熟語	円覚	円頂	円融（えんゆう）	円頓	円転	円陣	円融（えんにゅう）	円盤	半円	円熟
中国文献	■＊円覚経	(2)■＊説苑 - 弁物	■＊首楞厳経 - 四	■＊止観輔行伝弘決 - 一・一 ■＊天台四教儀	(1)■＊晉書 - 王述伝 (2)■＊白居易 - 新楽府・胡旋女 (3)■＊鶴林玉露 - 人部・老卒回易	(1)■＊東京夢華録 - 七				■＊図絵宝鑑 - 賞鑒
735										
797 頃										
835 頃										
835 頃か										
856										
900 頃										
984 ～ 985	□									
995 ～ 1335										
1010 か		□(3)								
1060 頃			□							
1120 頃か										
13C 前				○						
1231 ～ 53		○(3)								
1275										
1292 頃か										
南北朝					○(1)					
14C 後										
1423 頃	○									
1463 ～ 64 頃			○							
1477						○(1)				
1548 頃							○			
1712								□(1)		
1722									○(1)	
1725 頃										○
1779 ～ 1820 頃										
1798~1802										
1807~11										
1823										
1832~36										
1836					○(3)					
1855~58										
1860										
1870~71										
1872										
1874~76										
1875										
1877					○(2)					
1879~80										
1883~84										
1884										
1889										
1890										
1894									○(2)	
1895										
1902										
1905 ～ 06										
1908								○(1)		
1912						○(2)				
1916										
1917								○(3)		
1920 ～ 21		○(1)								
1923								○(2)		
1928										
1931										
1947										
1956										

概念分類	17	18	19	20	21	22	23	24	25
《物体の形状》							Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ
《仏語》									
《形の概念》	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ		Ⅲ				
《人の性情・雰囲気の様子》				Ⅳ		Ⅳ			
《単位》									
『日国』字音語素の意味番号	2	2	2	3	2	3	1	1	1
漢語熟語	円心	楕円	円周	団円	長円	円滑（えんかつ）	円球	円錐	円筒
中国文献	(2)■＊南海寄帰伝 - 四		(2)■＊隋書 - 天文志・天体	(2)■＊白居易 - 自詠老身示諸家属詩 ■小説粋言 - 三		(1)■＊蘇軾 - 竹詩			
735									
797 頃									
835 頃									
835 頃か									
856									
900 頃									
984 ～ 985									
995 ～ 1335									
1010 か									
1060 頃									
1120 頃か									
13C 前									
1231 ～ 53									
1275									
1292 頃か									
南北朝									
14C 後									
1423 頃									
1463 ～ 64 頃									
1477									
1548 頃									
1712									
1722									
1725 頃									
1779 ～ 1820 頃									
1798~1802	○(1)	○	○(2)						
1807~11				○(3)					
1823					○				
1832~36						○(1)			
1836							○		
1855~58								○	□(2)（「円柱」（2）に同じ）
1860			○(1)						
1870~71				○(1)					
1872									
1874~76									
1875				○(2)					
1877									
1879~80									○(1)
1883~84									
1884									
1889									
1890						○(2)			
1894									
1895									
1902									
1905 ～ 06									
1908									
1912									
1916									
1917									
1920 ～ 21									
1923									
1928									
1931									
1947									
1956									

概念分類	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
《物体の形状》	Ⅰ			Ⅰ						Ⅰ
《仏語》										
《形の概念》			Ⅲ			Ⅲ				
《人の性情・雰囲気の様子》					Ⅳ					
《単位》		Ⅴ					Ⅴ	Ⅴ	Ⅴ	
『日国』字音語素の意味番号	1	4	2	1	3	2	4	4	4	1
漢語熟語	円柱	円貨	同心円	円卓	円滑（えんこつ）	円弧	円本	円価	新円	円墳
中国文献										
735										
797 頃										
835 頃										
835 頃か										
856										
900 頃										
984 ～ 985										
995 ～ 1335										
1010 か										
1060 頃										
1120 頃か										
13C 前										
1231 ～ 53										
1275										
1292 頃か										
南北朝										
14C 後										
1423 頃										
1463 ～ 64 頃										
1477										
1548 頃										
1712										
1722										
1725 頃										
1779 ～ 1820 頃										
1798~1802										
1807~11										
1823										
1832~36										
1836										
1855~58	□(2)									
1860										
1870~71										
1872		○(1)								
1874~76		○(2)								
1875										
1877										
1879~80										
1883~84	○(1)									
1884										
1889			○							
1890										
1894										
1895										
1902				○						
1905 ～ 06										
1908										
1912										
1916					○					
1917										
1920 ～ 21										
1923						○				
1928							○			
1931								○		
1947									○	
1956										○

次に，日本と中国における漢字「円」の意味と用法について比較するために，『日国』（字音語素，単独用法），『大漢和辞典』および『漢語大詞典』の三つの辞書の意味記述を比較してみたのが次の**【表 2】**である。

次の意味は，日本語の辞書である『大漢和辞典』と『日国』の字音語素のみに確認できたが，中国語の辞書である『漢語大詞典』では確認できなかった意味である。

○　大漢和辞典

・②まはり。

・③まるい。　　㋺尽きない。

・④まるくする。まるめる。

・⑥水。

・⑦君。

・⑨なめらかな声。

・⑩員に通ず。

・⑫隕に通ず。

・⑭姓。

・⑮銭貨の一単位。又，元ともいふ。　　㋑ほとり。あたり。

○日国の字音語素　（該当なし）

また，次の意味は，『漢語大詞典』のみに確認できたが，『大漢和辞典』と『日国』の字音語素では確認できなかった意味である。

・⑥豊満；飽満。〔ふっくらとした；充実した〕

・⑫婉転，委婉〔穏やかな物言い・婉曲〕

・⑰旋転。参見“圓轉”，“圓旋”。〔回転すること。“圓轉①”，“圓旋”も参照。〕

・⑲量詞。指称円形物。〔数量詞。丸いものを指す。〕

・⑳仏教語。不偏倚。〔仏教用語。不偏不党。〕

これらのことを踏まえて，熟語「円形」について調査したことを報告していくこととする。

3 「円」の意味変遷の考察

3－1 「円形」の先行研究

熟語「円形」を考察するにあたり，先行研究を国研や国文学研究資料館などの主要な検索サイトで探索したが関係論文は見出せなかった。幕末・近代の漢語研究のための辞典や漢語索引類にも，特に熟語「円形」について掲載したものは見られなかった。そこで本論では，辞書類や用例検索データベースで収集し得た用例をもとに，独自に意味変遷を考察していくこととする。

3－2 「まるい」ことを示す「円」

ア 「まるい」ことを示す二つの意味記述

『日国』の字音語素の意味記述には，「⑴まるい。」「⑵まるい図形。」というように，丸い形を指すものが二種類ある。この二つは一見しただけでは意味の違いが分かりにくい。そこで，熟語例の傾向からいま試みにそれぞれの熟語例を，具体的事物〔●〕と抽象的概念〔◎〕とに分類してみたところ，一定の傾向が認められた。各熟語の初出年を記載すると以下のようになる。

⑴まるい。…●円円〔該当なし〕／◎方円〔835 頃〕／●円転〔南北朝〕*1／●円蓋〔797 頃〕，●円球〔1836〕，●円丘〔856〕，●◎円形〔900 頃〕*2，●円座〔735〕，●円陣〔1477〕，●円錐〔1855～58〕，●円卓〔1902〕，●円柱〔1855～58〕，●円項〔1010か〕，●円筒〔「円柱」と同様〕，●円盤〔1712〕，●円墳〔1956〕

⑵まるい図形。…◎楕円〔1798～1802〕，◎長円〔1823〕，◎半円〔1722〕，◎同心円〔1889〕／◎円弧〔1923〕，●◎円周〔1798～1802〕*3，◎円心〔1798～1802〕／

＊1 「転」は転がるという具体的概念であると解して，具体的事物とし

【表 2】『日国』『大漢和辞典』『漢語大詞典』での「円（圓）」の意味の比較

連番		『大漢和辞典』（圓）	『日本国語大辞典』の字音語素（円）
1	○	①まる。	(2) まるい図形。／楕円、長円、半円、同心円／円弧、円周、円心／
2		②まはり。	
3	○	③まるい。㋑たま・まるのやうなこと。	(1) まるい。／円円／方円／円転／円蓋、円球、円丘、円形、円座、円陣、円錐、円卓、円柱、円頂、円筒、円盤、円墳／
4		③まるい。　㋺尽きない。	
5	○	③まるい。㋩まつたい。	
6	○	③まるい。㋥おだやか。	(3) おだやか。満ちている。欠けたところがない。／団円／円滑、円熟、円満、円頓、円融／円覚、円悟／
7		④まるくする。まるめる。	
8	○	⑤天。	
9		⑥水。	
10		⑦君。	
11	○	⑧人によく交はること。社交に巧みなこと。又、その人	
12		⑨なめらかな声。	
13		⑩員に通ず。	
14	○	⑪圜に同じ。	
15		⑫隕に通ず。	
16	○	⑬原に通ず。原夢・圓夢を見よ。	
17		⑭姓。	
18		⑮銭貨の一単位。又、元ともいふ。㋑ほとり。あたり。	
19	○	⑮銭貨の一単位。又、元ともいふ。㋺銭貨の一単位。百銭が壱円にあたる。	(4) 貨幣の単位。／新円、日本円／円価、円貨、円本／
20	×		
21	×		
22	×		
23	×		
24	×		

『漢語大詞典』（圓）	『日本国語大辞典』の音読みの単独用法（円）（用例は初出例）
①円周；環形。〔円周；環状。〕	(2) 平面上の曲線の一つ。一定点から等距離にある点の軌跡。円周。また、それによって囲まれた平面の部分。＊工学字彙〔1886〕〈野村龍太郎〉「Circle 円。圜」
②丸；球。〔団子；ボール〕 ⑪円潤；滑利。〔円やかで艶やかであること；滑らかでつるつるとした様〕	(1) まるいこと。まるいもの。まるい輪。＊吾輩は猫である〔1905 ～ 06〕〈夏目漱石〉二「今度は左りの方を伸して口を中心として急劇に円を劃して見る」
④謂運転無礙。〔支障なく動作することを言う。〕 ⑦完満，円満。〔完全な・完璧な〕 ⑨保全；周全。〔安全を守ること・周到で安全である様。〕 ⑩完整。如:破鏡重円。亦指使完整。如:自円其説。参見“圓備”、“圓謊”。〔完全な。例えば「破鏡重円」（割れた鏡が再び一つとなること＝人間関係が再び修復されることの喩え）、また「自円其説」（自らその説を完全にすること＝持論や嘘が矛盾ないよう取り繕うこと）、「円備」「円謊」も参照〕 ⑬円熟。〔円熟している・熟練している〕	(4) 仏語。完全で欠けるところがないこと。
⑧美満。〔円満な〕 ⑭団円。〔団欒すること〕	
③指天。〔空を指します。〕	
⑤指処世的円滑〔世渡り上手・八方美人であること〕	
⑱囲。参見“圓坐”。〔囲むこと〕	
⑯用同“原”。推究，解釈。〔「原」と同じく用いる。推論・解釈すること〕	
⑮墨及銭幣等円形物単位名，後専指貨幣，併不受円形的限制。〔墨や銭などの丸い物質の単位の名称で、後に金銭のみを指すようになり、丸さに限定されなくなった。〕	(3) わが国の貨幣の基本単位。【以下略】＊滑稽本・人心覗機関〔1814〕上「ヲット二円（エン）二方よしよし」
⑥豊満；飽満。〔ふっくらとした；充実した〕	
⑫婉転，委婉〔穏やかな物言い・婉曲〕	
⑰旋転。参見“圓轉①”、“圓旋”。【回転すること。“圓轉①”、“圓旋”も参照】	
⑲量詞。指称円形物。〔数量詞。丸いものを指す〕	
⑳仏教語。不偏倚。〔仏教用語。不偏不党。〕	

て分類した。

＊2 『日国』記載の「円形」の用例において，『菅家文草〔900 頃〕』『名語記〔1275〕』では具体的事物〔●〕の意味で，『暦象新書〔1798～1802〕』では抽象的概念〔◎〕の意味で用いられていたため，両方に属するとした。

＊3 『日国』には「(1)（―する）円を描いて動くこと。」という具体的事物〔●〕の意味と「(2) 平面上の曲線の一つ。一定点から等距離にある点の軌跡。円。」という抽象的概念〔◎〕の意味の両方が記載されていたため，両方に属するとした。なお，上記の初出年は抽象的概念としての用例であり，具体的事物の意味での初出は 1860 年である。

この分類からわかることは，1700 年代までは具体的事物〔●〕の用例が主だが，「半円〔1722〕」の登場を境に抽象的概念〔◎〕の意味が急増しているという傾向である。そのため，ある時期を境として「具体的な物体のまるさ」を表す意味から「抽象的な図形のまるさ」を表す意味への意味変化，あるいは派生があったと考えられる。

イ　まるさを表す「円」の変化

一番初めに抽象的概念の意味を獲得した熟語は「方円」である。『日国』では，「方円」の古い用例として『性霊集』の「徒懐玉「方円人法，不如黙」」を挙げている。この用例は「教えを説く人とそれを聴く人の心が一方は四角で他方が丸くては，説かないに限ります。」という意味である（加藤精一訳（2015）『ビギナーズ日本の思想　空海「性霊集」抄』株式会社 KADOKAWA）。「方円」という熟語は直接図形的なものを指しているわけではなく，単に形態としての円と四角を「方円」と呼んでいると解釈できる。そのため，抽象的概念を指す熟語の中では古いものであるが，「方円」をきっ

かけとして図形概念の意味が生まれたとは考えにくい。

「方円」の次に登場する抽象的概念の意味を持つ熟語は「半円〔1722〕」である。「半円」の登場後に「円形」「円心」「楕円」といった熟語が登場するが,「抽象的な図形のまるさ」という意味での用例に限らなければ「円形」の初出は 900 年頃であり,「半円」よりも早い。そのため,「円」全体の意味変化を考察するには抽象的概念の意味を持っていながら具体的事物を指す熟語として早くから登場していた「円形」に注目するのが良いだろう。

『日国』における抽象的概念の意味の「円形」の初出は『暦象新書〔1798 ～ 1802〕』である。それ以降の,明治時代における朝日新聞・毎日新聞・読売新聞に出現した「円形」を年代順に並べると以下の通りであった。なお,文字がつぶれていて読めなかった箇所は「〓」で示している。

【表 3】新聞記事における「円形」の用例

番号	表記	ルビ	刊行日	新聞社	記事名
1	圓形	まるがた	1878.05.10 朝刊	毎日	○大阪府下第三區の區……
2	圓形	マルガタ	1879.11.27 朝刊	毎日	［広告］ 新作ガラス刀円形ガラス截器具／東京・堀江町　片桐起太郎
3	圓形	まる〓た	1880.06.17. 朝刊	朝日	○松島文楽座の菅原は……
4	圓形	〓（「ゑ」か?）んけい	1883.08.15. 朝刊	朝日	○因幡国岩井郡岡益村……
5	圓形	ゑんけい	1886. 10.08. 朝刊	朝日	東京通信（十月五日発）
6	圓形	ゑんけい	1886. 10.28. 朝刊	朝日	綬面円形綵花加附〈画〉
7	圓形	〓（「ゑ」か?）んけい	1887. 01.26. 朝刊	朝日	清国貨幣の事
8	圓形	ゑんけい	1887. 02.01. 朝刊	朝日	奉迎の准備〈画〉
9	圓形	ゑんけい	1887. 03.12. 朝刊	朝日	池島爆裂弾事件続聞
10	圓形	まるがた	1887. 03.15. 朝刊	朝日	チヤリニの獣園及び曲馬

1887 年に一部「まるがた」の読みがあるものの, 1880 年頃までには「まるがた」の読みが，それ以降は「エ（ゑ）ンケイ」の読みが多く使われていたことが分かる。「円形（まるがた）」は, それぞれ「円（まる）」と「形（がた）」という訓読みの漢字二字が組み合わさってできた熟語である。そのため,「円形（エンケイ）」という読みが定着する以前は,「円形（エンケイ）」という一つの熟語としてではなく「円（まる）」と「形（がた）」という訓読み漢字二字が組み合わさった語として理解されていたと考えられる。

なお,「まるがた」と読む似た意味の熟語に「円形」以外では「円型」「丸形」「丸型」がある。それぞれ, CHJ で文字列検索を試みたところ,「丸形」の初出は 1895 年,「丸型」の初出は 1925 年であった。また，短単位検索で「マルガタ」を調べたところ,「丸形」「圓肩」「丸型」の三つの熟語が見受けられ，それぞれの用例の最古の年代は「丸形」は 1895 年,「圓肩」は 1909 年,「丸型」は 1925 年であった。なお,「円型」の用例は文字列検索，短単位検索のどちらにも見受けられなかった。そのため,「円形（まるがた）」はこれらの熟語から派生した語ではなく「円（まる）」と「形（がた）」の二字が合わさり生まれた語だと仮定して考察する。

『日国』の「まる【丸・円】」の解説には「「まろ」の変化した語」であると記載されている。そこで『日国』における「まろ【円・丸】」の意味説明と語誌を確認したところ，以下のように記述されていた。

まろ【円・丸】解説・用例

【一】〔形動〕

(1) 球状にかたまっているさま。また，円形のさま。まるいさま。まる。

＊宇津保物語〔970 ～ 999 頃〕菊の宴「沈をまろにけづりたるぬきす・銀の半挿（はんざふ）」

＊南海寄帰内法伝平安後期点〔1050 頃〕一「有るひと小く円（マロナル）羅（みつふるひ）の纔かに一升両合を受くるを作りて」

(2) 体型がふっくらとしているさま。丸々と太っているさま。

＊源氏物語〔1001 ～ 14 頃〕宿木「まろに美しく肥えたりし人の，すこし細やぎたるに」

＊栄花物語〔1028 ～ 92 頃〕楚王の夢「御乳は〈略〉白うまろに，をかしげにて臥させ給へるに」

(3) あるまとまりの全体。→まろながら。

【二】〔名〕

銭をいう。

＊塵袋〔1264 ～ 88 頃〕七「銭をまろと云ふはすがたのまろなればよしばみて云ふ歟」

＊鈔〔1445 ～ 46〕六「銭をまろ共云也，常には其形以円云也と思へ共其由有て云也」

語誌

平面的な円形を表わす「まと」「まとか」に対して「まろ」は本来円筒形や球形を表わしたものという。中世以降「まる」に転ずるとともに，平面，立体ともに意味するようになった。→「まる（丸）」の語誌。

「円形（まるがた）」における「円」は，この中でも「(1) 球状にかたまっているさま。また，円形のさま。まるいさま。まる。」の意味を持った語であると考えられる。

なお，『日国』の「まる【丸･円】」の語誌には以下のように書かれていた。

語誌

(1) 中世期までは「丸」は一般に「まろ」と読んだが，中世後期以降，「まる」が一般化した。それまでも「万葉 - 二〇･四四一六」の防人歌には「丸寝」の意で「麻流禰（マルネ）」とあり，「塵袋 - 一〇」には「下臈は円（ま

ろき）をばまるうてなんどと云ふ」とあるなど，方言や俗語としては「まる」が用いられていたようである。本来は，「球状のさま」という立体としての形状を指すことが多い。

(2) 平面としての「円形のさま」は，上代は「まと」，中古以降は加えて「まどか（まとか）」が用いられた。「まと」「まどか」の使用が減る中世には，「まる」が平面の円の意をも表わすことが多くなる。

(3) 名称の構成要素として，あるいは自称の代名詞として「まろ」を用いることがあるが，やはり中世期に「まる」に転じている。

『日国』字音語素欄の「⑴まるい。」「⑵まるい図形。」に記載されている中世以前の熟語は具体的事物の丸さを表すものが多い。これは，当時「円」は円筒形や球形の物体を指す「円（まろ）」の意味は持っていた一方で，平面の形を指す「円（まる）」の意味はまだ獲得していなかったためだと考えられる。

円筒形や球形の物体を指していた「円（まろ）」が中世以降になり「円（まる）」へと変化したことで，物体に限らず平面上のまるい形を指すときにも「円」が用いられるようになる。図形としての抽象的概念を指す熟語が急増した江戸時代は，平面上の図形の意味を「円」が獲得した中世以降という時期と一致する。まるい図形を指す熟語に「円」が使われ始める背景にはこのような「円（まろ）」から「円（まる）」への変化があったと考えられる。

また，ほとんどの抽象的概念を指す熟語の初出である『暦象新書』は，西洋の物理学・天文学の概念を説明する蘭学書を翻訳したものである。そのため，これらの熟語そのものは 1700 年代になって西洋学問の訳語として生み出されたものだと言えるだろう。なお，日本語歴史コーパスの文字列検索で「円」を調べたところ，図形を指す「円（まる）」が生まれた中世頃から「半円」の登場した 1722 年までには「円」は人物名や仏教語，

具体的事物のまるさを指す用例はあったものの図形の意味での用例は見受けられなかった。図形のまるさを指すようになった「円（まる）」の意味が, 近代に日本へと流入した西洋学問の翻訳語の中で音読みの「円（エン）」の形で用いられたことで定着していったと考えられる。

3－3 「抽象概念の角が立たないこと」を指す「円」

ア　仏教的意味を持つ熟語と持たない熟語

『日国』の字音語素の意味記述の中でも「(3) おだやか。満ちている。欠けたところがない。」は雰囲気といった抽象概念の角が立たないことを指す意味であると言える。熟語例の中には仏語が多く見受けられたため, それぞれの熟語を仏教的意味（▲）と仏教的でない意味（△）とに分類し, それぞれの初出年代を記載して年代順に並べたところ以下のようになった。

▲△円満〔835 年頃か〕[*4], ▲円覚〔984 ～ 985〕, ▲円融（えんゆう）〔1060 頃〕, ▲円頓〔1283〕, ▲円悟〔1474〕[*5], ▲円融（えんにゅう）〔1548 頃〕, △円熟〔1725 頃〕, △団円〔1807 ～ 11〕, △円滑（えんかつ）〔1832 ～ 36〕, △円滑（えんこつ）〔1916〕,

＊4 『日国』における「円満」の意味記述には仏教的意味と仏教的でない意味の両方があったため, 両方に属するとした（3－3 ウ参照）。なお, 上記の初出年代は仏語としてのものであり, 仏語でない意味としての初出は 995 ～ 1335 年（『浄業和讃』）である。

＊5 『日国』には見出し語にない語であるが, 『仏教語大辞典』に掲載されていた熟語として追記し仏語として分類した。なお, 記されている初出年代は『日国』の見出し語「**証明**」における用例「能**円悟**を証明たぞ（報恩録　上・二）」によるものである。

「円融（えんにゅう）」について『日国』では「「えんゆう（円融）」の連

声。」と書かれている。つまり,「円融（えんにゅう）」と「円融（えんゆう）」は別の語として解説が付けられてはいるものの，実際は発音が違うだけの同じ語であると言える。そのため，登場時期も「円融（えんゆう）」と同時期だと考えても良いのではないだろうか。

「円融（えんにゅう）」の登場時期も「円融（えんゆう）」と同様の 11 世紀頃だと考えると，仏教的意味の熟語は中世以前に登場し，一方，「円満」を除いた仏教的意味を持たない熟語は近世以降に登場していることが分かる。仏語と仏教的意味を持たない語とでは登場時期が異なっているため，この二つは異なる経緯を辿って生まれたと考察する必要があるだろう。

イ　仏語で用いられる「円」の登場

「円」が用いられる仏語には中国文献の用例があるものが多い。それぞれの熟語の中国文献での用例は以下の通りである。なお，仏教書と宗教書には□を付けた。

円満[*6]…隋煬帝―入朝遣使参書「仰承衡嶽，功徳円満」
　　□仏地経論 - 一「謂顕世尊, 仏土円満, 功徳円満, 眷属円満, 安立仏地」[*7]
円覚…□円覚経「無上法五有大陀羅尼門，名為円覚。流出一切清浄真如菩提涅槃及波羅蜜，教授菩薩」
円融（えんゆう）…□首楞厳経 - 四「如来説地水火風本性円融, 周遍法界, 湛然常住」
円頓…□止観輔行伝弘決 - 一・二「円頓者，円名円融円満，頓名頓極頓足」[*8]
　　□天台四教儀「明円教者，円名円妙・円満・円足・円頓故名円教也」
円悟…□大蔵法教 - 五〇「九祖，始祖無畏論主龍樹尊者一相，二祖建立中観北斉尊者**円悟**，三祖円証法華南嶽尊者止観，四祖天台智者法空宝覚霊慧，五祖結集教蔵章安尊者総持，六祖伝持教観法

華尊者円達，七祖伝持教観天宮尊者全真，八祖伝持教観左渓尊者明覚，九祖天台記主荊渓尊者円通」＊9

□五燈会元 - 一七「白兆不識書，**円悟**宗乗。宗乗非言詮故」＊10

円融（えんにゅう）…なし

＊6　仏語としての意味からから転じた「(2)（形動）（―する）欠けることなく，まるく満ちていること。また，顔などが豊かにふくらんでいるさま。」という意味にも中国文献の用例は存在するが，ここでは仏語としての意味の用例のみを記載している。

＊7　『仏地経論』（7巻）は，新光著『仏地経』における法を述べた論書で，唐の玄装訳による仏教書。

＊8　『止観輔行伝弘決』が仏教書だという記載は見当たらなかったが，本書は隋代の仏教書である『摩訶止観』の注釈書であるため，仏教書として分類した。（東京大学文学部・大学院人文社会系研究科「荊渓湛然『止観輔行伝弘決』の研究―唐代天台仏教復興運動の原点―」https://www.l.u-tokyo.ac.jp/postgraduate/database/2005/401.html#:~:text=%E3%80%8C%E4%BB%8F%E3%81%AE%E6%95%99%E3%81%88%E3%82%92%E4%BB%A5%E3%81%A3,%E3%81%8F%E3%81%97%E3%81%9F%E3%81%AE%E3%81%A7%E3%81%82%E3%82%8B%E3%80%82（2022年11月3日参照））

＊9　『日国』に「円悟」の見出し語は無かったため，本文検索で得られた，見出し語「九祖」にある用例を引用した。

＊10　『日国』に「円悟」の見出し語は無かったため，本文検索で得られた，見出し語「宗乗」の用例を引用した。『五鐙会元』は中国南宋の禅僧普済編とも慧明編とも伝える禅宗通史であるので，宗教書とみなした。

以上のように，「円融（えんにゅう）」を「円融（えんゆう）」と同じ語

であると見なすと，全ての熟語に中国の仏教書や宗教書（禅宗書）での用例があることが分かる。

古来日本で用いられていた和語「まろ（円，丸）」はもともと仏教的意味を持っていなかったと考えられる。漢字「円」の仏教的意味は，中国の仏教書などを通した仏教の受容に伴い，仏教概念での「円」の意味・用法の受容によって定着してきたものと推定される。

また『漢語大詞典』の「円」の意味記述には「(3) おだやか。満ちている。欠けたところがない。」と似た仏教的意味はなかったものの，「不偏倚（不偏不党）」という仏教的意味の記載があった。そのため，中国から日本へ「円」の仏教的意味が伝わった際，あるいは日本で「円」が仏教概念として使われているうちに本来の「偏らずに中立であること」を指す意味が「おだやかで欠けたところがないこと」を表す意味へと変化し，中国と日本の間に仏語に用いられる「円」の意味の違いが生じたのではないかと推察される。

ウ　仏教的でない意味への変化

「円満」は仏語としての意味を持っている一方で，仏語でない熟語としての意味も有している。『日国』における「円満」の意味記述は以下の通りである。

○えん - まん［ヱン‥］【円満】〔名〕

(1)（―する）**仏語**。功徳などが，十分に満ち足りていること。願いなどが十分に満たされること。

＊秘蔵記〔835 頃か〕「仏万徳円満中福徳辺云宝部」

＊今昔物語集〔1120 頃か〕七・五「我般若経を不書写ずと云へども，浄土に生れむ事，自然（おのづか）ら円満しなむ」

＊平家物語〔13 C 前〕七・竹生嶋詣「一度参詣の輩は，所願成就円満すと承はる」

＊撰集抄〔1250 頃〕一・七「われらもいくたびか，かの国王ともなり

けんなれども，隔生即忘して，すべて覚え侍らず。只ゆきてとまりはつべき仏果円満の位のみぞゆかしく侍る」

＊愚禿鈔〔1255〕上「円頓者 円名円融円満頓名頓極頓速」

＊日葡辞書〔1603 ～ 04〕「デウスワ ショゼン yemanno（エンマンノ）タイナリ」

＊隋煬帝 - 入朝遣使参書「仰承衡嶽，功徳円満」

＊仏地経論 - 一「謂顕世尊，仏土円満，功徳円満，眷属円満，安立仏地」

(2)（形動）（―する）（(1) から転じて）欠けることなく，まるく満ちていること。また，顔などが豊かにふくらんでいるさま。

＊浄業和讃〔995 ～ 1335〕上・中夜讃補接「如来この座のうへにして大寂定にいりたまひ相好円満したまひて，金山王のごとくなり」

＊本朝文粋〔1060 頃〕一四･為二品長公主四十九日願文〈慶滋保胤〉「若有未明之月輪，余習雲散，永令円満」

＊名語記〔1275〕四「望日に円満して, 又次第に闕減して, 晦日にいたる」

＊日葡辞書〔1603 ～ 04〕「Yenmanno（エンマンノ）ツキ〈訳〉満月」

＊新体詩抄〔1882〕鎌倉の大仏に詣でて感あり〈矢田部良吉〉「総青銅の大仏は 御身のたけは五丈にて 相好いとど円満し」

＊南史 - 梁武帝紀「畢有神光，円満壇上」

(3)（形動）（(2) から転じて）物事の状態が完全で，欠点のないさま。完全無欠。

＊国語のため〔1895〕〈上田万年〉今後の国語学「斯くて，其の方向を定めて研究に着手し，不備を補うて円満ならしめんとする」

＊福翁百話〔1897〕〈福沢諭吉〉三七「元来家に子を養ふて円満（ヱンマン）なりとは両親打揃ひ健康無事にして智徳の資に乏しからず〈略〉然る後始めて望む可き注文なり」

＊日本の下層社会〔1899〕〈横山源之助〉三・一・三「一時を瞞着して私を取るもの斯の如くにして，果して円満なる事業の発達を見るを得

べきや」

(4)（形動）人柄，社会，物事のやり方などが，かどだたないで，穏やかなさま。

＊青春〔1905 ～ 06〕〈小栗風葉〉春・九「家庭の幸福とか，夫婦間の円満とか云ふものは」

＊坊っちゃん〔1906〕〈夏目漱石〉九「其地の淑女にして，君子の好逑（かうきう）となるべき資格あるものを択んで一日も早く円満なる家庭をかたち作って」

この記述で「(2)（形動）（―する）欠けることなく，まるく満ちていること。また，顔などが豊かにふくらんでいるさま。」という意味は「(1)（―する）仏語。功徳などが，十分に満ち足りていること。願いなどが十分に満たされること。」という意味から転じて生まれたものと言えよう。この初出は995 ～ 1335 年であり，1700 年以降になって登場する仏教的意味を持たない語の初出に比べて，その登場が非常に早い。

ところで，この「円満」が登場してから 1725 年頃に「円熟」が登場するまでの間には「円（まろ）」から「円（まる）」への読みと意味の変化が起きていることが注目される。「まる【丸・円】」には「〔二〕（形動）欠けないで全部。形を完全に保っていること，完全に相当すること。また，そのさま。まるごと。まれに，「と」を伴って副詞的に用いる。」という，「円熟」「団円」「円滑（えんかつ・えんこつ）」といった仏語でない熟語に共通して見られる「（人格，知識，技芸，人間関係，物事といった）抽象概念が完璧で，滞りないこと」というような意味に類似した意味記述がある。一方で，「まろ【円・丸】」にはこれらのような「完全であること」を指す意味記述は見受けられない。そのため，仏語として日本に入って来た「円満」は仏教的でない意味を獲得したものの，当時は「円（まろ）」の意味としては定着せず，**読みが「円（まる）」へと変化したことをきっかけと**

して「欠けることなく完全である」という意味が「円」という漢字に定着し，以後この意味が字音読みとしての「円（エン）」でも一般的に浸透していったのではないか，と推定される。また，近世に起こる「（人格，知識，技芸，人間関係，物事といった）抽象概念が完璧で，滞りないこと」という意味の熟語の急増も，この「円（まろ）」から「円（まる）」への変化による仏教的でない「完璧である」という意味の定着によるものではないか，と考えることができるように思われる。

5　意味記述の改編

以上の考察を踏まえ，意味記述を改編し，歴史的変遷を考慮して意味の順番を配列すると以下のようになる。各意味記述には熟語例とその登場年代を記載した。なお「円満」「半円」は意味番号によって意味が異なったため，改編した意味記述に対応する意味番号を記載している。

Ⅰ　《物体の形状》三次元的に把握される，厚みを伴ったまるい形状の具体的事物。←旧(1)

…円座〔735〕，円蓋〔797 頃〕など

Ⅱ　《仏語》さとり･功徳などが欠けることなく十分に満ち足りていること。←旧(3)

…円満(1)〔835 頃か〕，円覚〔984 ～ 985〕など

Ⅲ　《形の概念》抽象的なまるさ。二次元的に把握される図形としてのまるさ。←旧(2)

…方円〔835 頃〕*11，半円(1)〔1722〕，など

Ⅳ　《人の性情・雰囲気の様子》欠けることがなく満ちていて，穏やかであるさま。（Ⅱからの派生義）←旧(3)

…円満(2)(3)(4)〔995 ～ 1335〕，円熟〔1725 頃〕など

Ⅴ　《単位》日本の貨幣単位←旧(4)

　　…円貨〔1872〕，半円(2)〔1894〕など

＊11　「方円」の初出例（『性霊集』）はかなり古く，具体的な物体の形状（Ⅰ）を指す用例ではないものの，一方，今日的な図形概念（Ⅲ）を指しているとも断じ難く，その意味と古さが課題であるが，「人の認識の相違」という抽象概念として使用されていると考えられたため，ここではひとまずⅢの用例として分類した。

6　今後の課題

本稿では「円」の意味変遷について考察したが，『日国』字音語素に書かれている「(4) 貨幣の単位。」の意味獲得の考察に至らなかった。『日国』の音読みでの単独用法の意味説明より，明治時代の新貨条例の影響を受けたものだと推測されるが，詳細な調査が必要である。

また『日国』では「円（まる･まろ）」の意味記述は「まる【丸･円】」「まろ【丸・円】」のように「丸（まる・まろ）」と同様のものであるとして説明がされていた。読みも意味も同じである「円（まる･まろ）」と「丸（まる・まろ）」の関係も，「円（エン）」の意味を考察するにあたって調査をする必要があるだろう。

参考文献

漢語大詞典出版社『漢語大詞典』（1986 ～ 1994 年）

国立国語研究所『中納言』https://chunagon.ninjal.ac.jp/（2022 年 11 月 20 日参照）

小学館『日本国語大辞典第二版』（2000 ～ 2002 年）

小学館『例文 仏教語大辞典』（1997 年）

大修館書店『大漢和辞典』（1955 ～ 2000 年）

朝日新聞社「朝日新聞クロスサーチ」https://xsearch-asahi-com.glim-ezp.glim.gakushuin.ac.jp/top/（2022 年 10 月 19 日参照）
毎日新聞社「毎索」https://dbs-g-search-or-jp.glim-ezp.glim.gakushuin.ac.jp/WMAI/IPCU/WMAI_ipcu_menu.html（2022 年 10 月 19 日参照）
読売新聞社「ヨミダス歴史館」https://database-yomiuri-co-jp.glim-ezp.glim.gakushuin.ac.jp/rekishikan/（2022 年 10 月 19 日参照）

第 5 章　漢語語基「脈」――医学的「血管」「脈動」と近代化

安部清哉・岡野歩夢

(0) はじめに

皆さんは，「脈」という漢字を見てどのような意味を連想するだろうか。おそらく，「動脈」や「脈拍」のように「血液の流れ」に関連した意味を連想する人が多いだろう。しかし，血液の流れに関連する意味を持つ熟語が誕生したのは主に近代以降であり，近世以前は「すじ状の連続したもの」（水脈，山脈等）や，「つながり」（人脈，文脈等）という意味が主流であった。それが，いつから，どのようにして血管や血液の流れの意味を獲得するようになったのだろうか。漢字「脈」および漢語語基としての「脈」の意味の変遷について考察する。

(1)『日本国語大辞典』の字音語素の意味記述

漢語語基「脈」について『日本国語大辞典』の「字音語素」には以下のように記述されている。

○【脈】［ミャク］

(1) 動物の血のくだ。血管。／静脈，動脈／脈動，脈搏，脈流／
(2) すじになって続いているもの。／鉱脈，山脈，水脈，支脈／脈翅類／
(3) すじみちのつながり。／脈絡／血脈，命脈，語脈，文脈，人脈（じんみゃく・にんびゃく），乱脈／

その意味毎に例示されている熟語について『日国』での初出例の年代を追記すると以下のようになる。

(1) 動物の血のくだ。血管。
動脈（1774），静脈（1811），／脈動（1810），脈搏（1862），脈流（初出年記述なし），【※「血脈（けつみゃく）」の「(1) 体の中の血液の流れる管。血管。」の例が **1060 年に**みられた】
(2) すじになって続いているもの。
鉱脈（1876），山脈（1836），水脈 **(900 頃)**，支脈（1877）／脈翅類（初出年記述なし）
(3) すじみちのつながり。
脈絡（17C 後頃）／血脈（**けちみゃく**, 1000）〔**仏語**〕, 命脈（1231~53），語脈（1231~53）〔**仏語**〕，文脈（1879），人脈（にんびゃく 1692・じんみゃく 1970），乱脈（の(1)，1886），【『日国』見出しにある「法脈（1894）〔**仏語**〕」，「意脈」（1783）を参考まで追記する】

【注：上記には「脈がある」における「脈搏（脈拍）」等における脈の「拍動」の意味の記載がない。この「脈」は「脈拍」や「脈動」における動きを表している部分である「拍」「動」の意味が「脈」の中に言わば意味的に縮約して含まれるようになって出来た語基の意味であると解釈できる（「脈（拍）がある」⇒「脈がある」,「脈（動）がある」⇒「脈がある」）。単独用法には無論この「脈拍」の意味の記載がある。語基としての用法

としても，この意味で，下記の熟語「三脈」(1717) の語基「脈」の意には 4 番目の意味として，「⑷脈動，脈拍を意味する。」を認めることができよう。4 節の意味の新分類に追記しておくことにする。【安部追記】

同様の熟語には「平脈」(1477) ＝「(1) 死にかけた時の，弱い**脈搏（みゃくはく）**。」,「脈体」(1487),「死脈」(15C 後半),「**乱脈⑵**」**(1548)** ＝「(2) 不規則に**うつ脈。乱れた脈搏**。不整脈。」,「**診脈」(室町中)** ＝「**脈搏**をみること。脈をしらべること。診察をすること。＊文明本節用集〔室町中〕「診脉 シンミャク」」,「緊脈」(1566),「朝脈」(1640),「代脈」(1677),「按脈」(1891) 等がある。

○「三脈」＝左右の頸（けい）動脈と右手の脈との三か所の脈搏（みゃくはく）を同時に調べて，その**脈搏**の整，不整によって吉凶を**判断する占法**。

＊浄瑠璃・聖徳太子絵伝記〔1717〕三「是が老医のきてんの療治，右の手の三脈が三さがり，二あがりにぴんぴんしたる見立也と」】

上記の意味分類の「(2) すじになって続いているもの。」と「(3) すじみちのつながり。」は類似しており，その違いが分かりにくい。

しかし，「(2) すじになって続いているもの。」の語例はいずれも「**具体的な事物が**ひとすじに続いているもの」であり，一方で (3) の語例は「**抽象的な概念**を指し，事物の何らかの**関連性，連続性，つながり**」(ひとまず「血脈」を除いておく) であると再分類することができる。

また，「(3) すじみちのつながり。」に分類されている「血脈」であるが，次に『日国』の意味で見るように，「けちみゃく」と「けつみゃく」の二種類の読みがあり，意味も異なる。

◆「血脈（けちみゃく）」＝

(1) 親族としての血のつながり。また，血のつながる親族。血統。血

すじ。けつみゃく。

＊和英語林集成（初版）〔1867〕「Kechimyaku（ケチミャク）ガ タエル」【他の例略】

(2) **仏語**。教理や戒律が師から弟子へと**代々伝えられることを血のつながりにたとえた語**。（後略）けつみゃく。」

＊権記 - 長保二年〔1000〕八月二〇日「雖非入室弟子，只薦挙年臈已積血脈相伝之者」【以下，例と(3)(4)(5)を略】

◆「血脈（けつみゃく）」＝【(2)以下(4)まで「けちみゃく（血脈）」に同じ。とあり，例略す】

(1) **体の中の血液の流れる管。血管。**」

＊本朝文粋〔1060 頃〕八・春生逐地形詩序〈慶滋保胤〉「水泉亦血脉。暁冰消而波暖」【他の例略】

上記の後者「けつみゃく」の方は字音語素の(2)の「具体的な事物」に該当する一方，より古い意味である前者の「けちみゃく」の方は「血のつながりにたとえた語」とはされるものの，字音語素(3)「すじみちのつながり。」に相当する「抽象的な概念」であり，師と弟子との間の教えの「連続性」を意味していることがわかる。即ち，「血脈」には字音語素の意味(2)と(3)との両方の意味があることが確認できる。

さらに「血脈（けちみゃく）」は「仏語」とある。「仏語」という点では，やはり同じ「(3) すじみちのつながり。」に分類されている古い用例である「語脈」と，さらに「法脈」((3)の末尾参照）も**仏語**であることが『日国』からわかる。

◆「語脈」＝

(1) 語と語とのつながり。ことばとことばの続きぐあい。

＊大学垂加先生講義〔1679〕「中庸と語脈同じくして，内は身，外は物也」【他の例略】

(2) **仏語**。教義に関する伝統的な語釈を受け継ぐこと。

＊**正法眼蔵**〔1231~53〕偏参「たとひ東土の全土，たちまちに極涌して参侍すとも，身にあらず，さらに語脈の翻身にあらず」

◆「法脈」＝**仏語**。法義が師から弟子へと順次継承されて伝わること。

＊日蓮上人〔1894〕〈幸田露伴〉八「**天台智者大師の法脈**（ホウミャク）を伝へ来り」

即ち，(3)の抽象的な意味には**仏語の例が集中**していることがわかる。

ところで，上記の「けつみゃく」に「(1) 体の中の血液の流れる管。血管。」として 1060 年の例（『本朝文粋』〔1060 頃〕）がある。字音語素の「(1) 動物の血のくだ。血管。」の熟語例である「動脈（1774），静脈（1811），／脈動（1810），脈搏（1862），脈流（初出年記述なし）」の年代よりもかなり古い 1060 年頃には既に(1)の意味が生まれていたことになる。

《問題点》

○字音語素の（2）のうち，「水脈」のみが極端に古いが，この分類は適切か。あるいは液体の流れと見れば，(1)の血の流れに準じて考え，(1)に含めるべきか検討する余地がある。

○「(2) すじになって続いているもの。」と「(3) すじみちのつながり。」の意味分類が類似しており，差異が分かりにくいので，説明を工夫する必要がある。

○「血脈」には「けちみゃく」と「けつみゃく」の 2 種類があり，意味と初出年も異なるが，字音語素では片方の「血脈（けちみゃく）」のみの記述にとどまっている。それぞれの意味も考慮し，区別して記載する必要がある。

○上記の「注」に記載したように,「脈搏, 脈動」の意味と熟語例がない。

なお，漢語語基「脈」の漢字としての字源的特徴を把握しておく必要が

ある。また，漢字「脈」の文字単独としての国語的用法と，漢語語基「脈」の用法を照合して，用法や意味の相違を十分に把握しておく必要がある。そこでまず，『字通』での解釈を記載しておく。

○『字通』「脈」 10 画，7223

字音ミャク，字訓すじ

字形：会意

肉（肉）＋ 辰（はい）。辰は水脈。〔説文〕十一下に正字を𥳑（衆）に作り，「血理分れて，體に衆行する者なり」とあり，血脈をいう。脈理の連なるところを脈絡といい，経脈という。中国の古代医学は，その経脈の研究においてすぐれた成果を示した。〔史記，扁鵲倉公伝〕に，古書〔脈法〕の引用がみえる。

訓義　[1] みゃく，血のすじ，血脈。

[2] すじ，みち，つらなり，つづき。

[3] 水のすじ，水脈。

古辞書の訓

〔新撰字鏡〕脈　脉なり。血乃美知（ちのみち）なり

〔名義抄〕脈　チノミチ／脉　チノミチ・スヂ・サヤ

〔字鏡集〕脉・脈　スヂ・チノスヂ・チノミチ・サヤ

また，『日国』での単独用法は次の通りである。

○「みゃく【脈・脉】」〔名〕　――『日国』単独用法

(1) 動物の体内で血液の流通する管。血管。ちのみち。

＊文明本節用集〔室町中〕「脉 ミャク チスヂ 血脉」

(2)「みゃくはく（脈搏）」の略。

＊竹むきが記〔1349〕上「いかなる心地にか，いとあやしきを，脈なんゆかしき。心み給はん」

＊史記抄〔1477〕一四・扁鵲倉公「女人の脉の魚際へ上るは男を求

て不得がかうあるぞ」

＊虎明本狂言・法師が母〔室町末～近世初〕「物にくるふもござうゆへ，さけのしわざとおぼへたり，はるのみゃくは，ゆみにつるかくるがことくくるふにぞ」

＊わらんべ草〔1660〕一「夫拍子のおこりは, 人の脈にてしるべし, 是本の拍子也」

＊浄瑠璃・平家女護島〔1719〕三「御典薬和気の法印奥より立出, 今朝の御脈夜前の通りに相替らず」

＊新世帯〔1908〕〈徳田秋声〉三八「外眦（めじり）が少し釣上って, 蟀谷（こめかみ）の処に脈が打ってゐた」

(3)「みゃくどころ（脈所）」の略。

＊虎明本狂言・神鳴〔室町末～近世初〕「おもしろひ所にみゃくが有な，中々人間は手にござる，かみなり殿のはかしらにござるときき まらした」

(4)（医師がまず脈搏を調べて診察するところから転じて）前途の見込み。先の望み。→みゃくがある・みゃくがない。

＊第三者〔1903〕〈国木田独歩〉「又江間御自身の力で脈を取りかへす工夫もあるだらう」

(5) 一つづきになっているもの。また, そのすじみち。山脈, 水脈, 鉱脈, 文脈，人脈など。

＊草枕〔1906〕〈夏目漱石〉一「何でも谷一つ隔てて向ふが脉の走って居る所らしい」

＊英和和英地学字彙〔1914〕「Myaku. Vein 脈」

＊蘭学事始〔1921〕〈菊池寛〉「訳語の数も殖え, 章句の脈も, 明かに」

(6) 植物の葉などにあって，養分，水分などが流通する細い管。葉脈。

＊植学啓原〔1833〕一「植物無心臓，其脈無障膜」

＊生物学語彙〔1884〕〈岩川友太郎〉「Enervis 脈ヲ有セザル〔植〕」

発音　ニャク〔岐阜・鳥取・岡山・壱岐続〕ニヤク〔飛騨・愛知・伊予〕ミーヤク・ミヤゴ〔岩手〕ミヤク〔秋田鹿角・伊予〕ミヤグ〔津軽語彙〕ミヤコ〔山形〕ミヤゴ〔山形小国〕

辞書　下学・文明・天正・黒本・易林・日葡・書言・ヘボン・言海

表記　【脉】下学・文明・天正・黒本・易林・ヘボン・言海
　　【脈】書言・言海

これら『字通』での解釈と,『日国』の単独用法としての解釈も考慮に加え,以下考察していくことにする。

(2)　歴史的変遷の特徴

(1) で指摘した問題点を考慮しつつ，語基「脈」の全体的な傾向を分析すると，以下のような歴史的変遷の特徴を指摘することができる。

○字音語素で「(3) すじみちのつながり。」に分類されている,「血脈（けちみゃく)」や「命脈」はいずれも，血や生命のつながりを表す語として「脈」が使われるようになった語である。

○一方,『日本国語大辞典』によると，仏語としての「脈」が用いられる以前に，既に「水脈」という語が『菅家文草』に用いられていたことから，900 年頃の時点で「(2) すじになって続いているもの。」という意味を持っていたことがわかる。参考までに『日国』の「水脈」を次に掲載しておく。

○「水脈」

1) 地層の中で，ある幅をもって地下水の流れている部分。地下を流れる水の道。地下水の流れ。水理。

＊菅家文草〔900 頃〕二・古石「雲膚何望雨，水脈欲通泉」

＊本朝文粋〔1060 頃〕一三・祭亀山神文〈兼明親王〉「引水脈

而通洪流，穿石竇而下飛泉」

＊華陽国志 - 蜀志「李氷為郡守〈略〉識斉水脈，穿広都塩井諸陂池」【用例は１部略】

(2) 河海の中で船舶の通航に適した水路。水上の通り道。航路。水路。ふなみち。みお。

＊済北集〔1346 頃か〕六･棹「出入江湖早有名。能諳水脉別波瀾」

＊魏書 - 爾朱兆伝「爾朱家欲渡河，用爾作波津令，為之縮水脈」

(3) 医学でリンパ管をいう。

＊蘭学逕〔1810〕「zenuwen（白脈とあり）en（与と）watervaaten（水脈）loopende（行）na（へ）de chylzak（乳糜嚢）」

＊改正増補和英語林集成〔1886〕「Suimyaku スヰミャク 水脈〈訳〉リンパ腺」

○ 1060 年頃，「体の中の血液の流れる管。血管」を意味する「血脈（けつみゃく）」が現れているが，のちの西洋医学の伝来の際の「動脈，脈動，静脈，脈搏」などの語の増加に影響したことがうかがえる。

○「つながり」の意味を持つ「血脈（けちみゃく）＝（2）仏語。教理や戒律が師から弟子へと**代々伝えられること**を血のつながりにたとえた語。」が，1000 年頃に現れており，これが「(3) すじみちのつながり。」の古い例と考えられる。その後，「命脈」「語脈」（共に 1231~53）が現れていく。

○ 18 世紀後半になると，西洋医学の伝来に伴い，「動脈，脈動，静脈，脈搏」等が現れ，特に 1800 年代以降，増加していく。

○ 19 世紀になると「(2) すじになって続いているもの。」という意味を持ち，具体的な事物が続いて現れ，「山脈」「鉱脈」「支脈」などの語が増加していく。

○従来からの「(3) すじみちのつながり」という意味が近代以降も衰え

ることはなく，熟語も次第に増加している。さらに「文脈，人脈（じんみゃく），乱脈」など，**接尾辞的用法の派生辞「～脈」**の用法が拡大し，接尾辞「～派」型の熟語の造語が増加するようになる。

○ 20 世紀になると，「脈搏」を医者が調べる様子から転じて，「脈」の語単体で，物事の前途の見込み（「4）（医師がまず脈搏を調べて診察するところから転じて）前途の見込み。先の望み。」を表すようになった。

(3) 意味の分類と記述の改編案

上記の考察を踏まえて，意味記述を改編し，歴史的変遷を考慮してその意味の順番を配列すると次のようになる。ここではもっとも年代が古い例がある「水脈」を優先し，字音語素の⑵の意味を新分類ではⅠとして最初に移しておいた。しかし，「水脈」の年代が⑵の熟語よりかなり古いので，「水脈」の用例を十分に吟味する必要が残る。

ⅡとⅢの熟語の初出年は近接しているので，これらの熟語だけではいずれが先に発生したかは決しがたいが，ひとまず具体的な意味であるⅡを優先させて配置しておいた。Ⅱは仏語がその用法の起源である可能性がある。

Ⅰ　具体的な事物において，ひとすじに続いているもの。←旧意味分類⑵
　水脈（900 頃），山脈（1836），鉱脈（1876）　など

Ⅱ　抽象的な概念として，何らかの関連性，連続性をもってつながっているもの。つながり。←旧意味分類（3）
　血脈（けちみゃく）〔**仏語**〕（1000），語脈〔**仏語**〕（1231~53），命脈（1231~53），文脈（1879），法脈〔**仏語**〕（1894），人脈（1970）など

Ⅲ　動物の体内で血液の流通する管。血管。←旧意味分類（1）
　血脈（けつみゃく）（1060 頃），動脈（1774），静脈（1811）など

Ⅳ　脈搏（脈拍），脈動を意味する。「脈を診る」【安部追記】
「平脈」（1477），「脈体」（1487），「死脈」（15C 後半）

(4) 語基「脈」の転換点となった熟語とその使用開始時期

語基「脈」が持つ意味の転換点はこれまでに二回あったように思われる。

一回目は，1000 年頃に**仏語**としての「血脈（**けち**みゃく）」が生まれた時期である。「すじみち（血縁）のつながり」という意味が，約 60 年後に「血液の流れる血管」の意味として生まれる「血脈（**けつ**みゃく）」に何らかの影響を与えたものと考えられるからである。

二回目は，1060 年頃にみられた，「体の中の血液の流れる管。血管」を意味する「血脈（**けつ**みゃく）」の熟語の誕生の時期か，あるいはむしろその後に，新たに西洋医学の伝来を受け，近代以降に「動脈，脈動，静脈，脈搏」などの医学用語の増加がみられた時期である。

今後は，この「血脈（**けつ**みゃく）」の語が与えた影響と，語基「脈」を用いる医学用語の誕生とその背景を精査していく必要があると考える。

第 6 章　おわりに

取り上げた各語基は，幕末・近代において大きな意味変遷や用法の拡大を成し遂げ，いま現在，我々が使用しているような，新しい科学的あるいは西洋的意味に変化し，あるいはまた，近代的な新しい用法を獲得して今日の姿に至ったことがわかった。このようにして，「熱」「供」「円」「脈」の各語基は，近代的意味と用法を拡大していくことになり，現在使用される多くの新しい熟語を獲得するようになった。これらの語基において，私たちが日常的に理解し使用している意味・用法や熟語のかなりの部分は，幕末・近代に獲得してきたものであることが，具体的に明らかにできた。

【付記】第 2 章は，安部の指導に従いつつ村松が「熱」に着目して調査しまとめた草稿をもとに相談しつつ整理したものである。いずれの章も研究テーマと調査方法，論証の構成形式などは安部によるが，本文の文章表現自体はほぼ村松によるので，この第 2 章は村松著とした。第 3・4 章も同様であるがより安部の指導の部分が多いので安部との連名での著者扱いとした。第 5 章は前稿（安部他（2022））と同様に安部の演習での成果の一環である。

なお，本稿は次の研究成果の一部である。学習院大学東洋文化研究所 2020 ～ 2021 年度研究プロジェクト「日本近代漢語表現の形成と明治期教科書資料の日本語」（代表・安部清哉）

【参考文献】

（以下に本稿と同様の視点から漢語・漢字研究を試みた，安部の研究プロジェクト関連の論文を記載する。漢語研究一般の文献については，下記の安部編著（2021）の参考文献覧を参照されたい。）

安部清哉編著（2021）『明治初期理科教科書の近代漢語　中川重麗『博物学階梯』にみる実態［影印・翻刻・索引付］』花鳥社

安部清哉・漢語演習学生（2022）「漢語語基の史的変遷と漢字の“気づかない近代化”―熱，社，状，誘，美，会，性，直，貴，収，酸，識―」『東洋文化研究』24. pp.286-237

伊藤真梨子（2019）「語基「特」を含む漢語の幕末･近代における拡大」『人文』17.　pp.115-152.

伊藤真梨子（2020）「近代の「特徴」と「特長」―同音類義語の意味侵食―」『東洋文化研究』22.　横 pp.(167)-(192).

伊藤真梨子（2022）「語基「機」による二字漢語熟語の近代的展開――仏教語から蘭学用語，英華辞典類での翻訳語へ――」『東洋文化研究』24.p.236-218.

伊藤真梨子（2023）「非母語話者への語彙教育における使用場面重視と辞書記述の欠点把握――台湾漢語「發票」「傳票」と日本語の「伝票」との 2 対 1 対応――」『学習院大学大学院日本語日本文学』19. pp.16.

蓮井理恵（2019）「近代漢語「自然物」「天然物」「天産物」「天造物」類の変遷と意味分析」『人文』17. pp.153-185.

渡辺陽子（2019）「「生」と「活」を造語成分とし共通語基をもつ近代的類義二字漢語――「生計―活計」「生気―活気」等 10 組――」『学習院大学人文科学論集』28. pp.15-153.

趙　愛華（2020）「『開催』の基本語化――類義語「挙行」との比較――」『学習院大学日本語日本文学』16.pp.(16)-(29).